
白鷺の砦

浅葱恵莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白鷺の砦

【Nコード】

N6918K

【作者名】

浅葱恵莉

【あらすじ】

姫路城へと観光旅行に來た紗那は天守閣の急な階段から落下。

そして落ちた先はなんと江戸時代!?

動揺しているのもつかの間、紗那は姫路城の『千姫』と容姿が似ているため間違われて城に連れていかれる。しかも何故だか『神力』とかいう変な力まで使えるようになってる!?

未来に戻る方法を探すべく、仕方なく千姫の身代わりになった紗那だが:

巻き起こる陰謀の渦の中、二人は惹かれあう。

ファンタジーだけど、コメディー七割、恋愛二割、その他一割という構成の謎の物語。

少しでも興味を持った方、ぜひぜひお立ち寄りください！

遠雷と桜

天が、黒く染まっていた。

遠雷の低い唸りが聞こえたたん、辺りに銀色の雨が降り注ぐ。雨はあっという間にどしゃぶりになり、咲いている桜の花弁を濡らす。

桜の花から雨粒が滴る。

その様子を、城の窓から見つめていた人物は踵を返すと、軽く舌打ちをした。

狭く、暗い部屋の中を一周して、ピタリと停止。
ガン、と凄まじい勢いで床を蹴った。鶯張うぐいすばりの床は悲しげな音を立てる。

「憎い…あいつも憎い…こいつも憎い…」

悪に満ちた声とともにギリギリと歯を鳴らす。

その人物は床に跪くと、黒い雲に向かって両手を合わせた。

「天よ…黒い神よ…どうか、あやつを…ここに…！」

次の瞬間、黄色い閃光が光った。すさまじい轟音が辺りに響く。そんな中、そいつは満足そうな笑みを浮かべる。

「天が…願いを叶えてくれた…」

そいつは笑い続けた。まるで世界を我がものにしたかのように。

抜けるような空高い青空。ヒラヒラと舞い散る桜の花びら。

今日は春ムード全開だ。風が心地よい。

少女はうーんと背伸びをした。腰まで伸びた長い黒髪が揺れる。

愛らしい瞳に整った顔立ち、引き締まった紅色の唇。そして何より目をやるのが、その輝く綺麗な黒髪だ。

「紗那——っ、こっちよ、こっち！」

ふいに名前を呼ばれた。どっちだよ、と思いながらもカメラを手にして母の元へ。

「お母さん…また撮るの？これで何枚目よ…」

紗那はため息をついた。だが母はうれしそうに体をくねらせる。

「いいじゃない、お母さん姫路城初めてだもん、紗那だってうれし
いでしょ？」

そりゃうれしいのはたしかだ。歴史好きな私としては、姫路城はあ
こがれだった。

だが、母のテンションについていけないのである。久しぶりの旅行
で舞いあがっているのか。

旅行が久しぶりなのには訳がある。私は今年、十五歳で受験生。一
か月前まで負けるまいと必死に鉛筆片手に勉強していた。

そして、春休みに入り悪夢の日々からやっと解放。受験はみごとに
合格した。

県内トップ高に合格したお祝いにと、今日は姫路城へとやって来た
のだ。

自分で言うのも何だが、頭の良さには自信がある。

そんな私だが、なぜか逆に母に振り回されっぱなしだ。

姫路城と母をレンズにおさめ、シャッターをきる。

「ハイ、撮ったよ」
母にカメラを手渡す。満べんの笑みを浮かべると、紗那の手を取った。

「じゃあ次はいよいよ天守閣に行かない？」

「えええええっ!？」

思わず絶叫した。だって今日は休日。ものすごい人手で天守までは長蛇の列だ。

「いいじゃない、せっかく遠くまで来たんだからさあ」

しぶしぶ返事をした。長く急な階段を上ると最後尾につく。

それにしても本当にすごい人手だ。さすが日本の世界遺産。

姫路城の別名は『白鷺城』だ。その由来は白しつくいの連立する優美な天守閣がシラサギの飛ぶ姿に見えることからと言われている。

考えていると、母が振り返る。

「紗那、ヒマだからクイズよ」

「へ？」

いつの間にクイズ大会になったのか、驚いている紗那に構わず問題を出す。

「姫路城を建設した人物は誰だ」

「い…池田輝真政が秀吉の立てた城を大改造したと言われるが、詳しいことはよく分からない」

はつきり言って、こんなクイズチョロすぎる。受験勉強で何回も習った。

しかし母の攻撃は終わらない。

「姫路城の西の丸は、誰のために建設されたか」

「えっと…姫路こじの藩主だった本多忠刻の正室、千姫のため」

何か建設にこだわってるよな～と思いながらも答えた。

母はくずれそうなほど笑顔になると、正解っ、やっぱり私の娘だわ～と舞い上がる。

今日本当にテンション高すぎだろ、一発ぶんぐったら治るのかと思っただ。

そんなこんなで拳を握りしめていると、とたんに列が前進し始めた。いつのまにか、紗那の後ろにはたくさんの人が並んでいる。

それを何となく眺めて進んでいたら、ごつごつした石段の一部が足にひっかかった。続いて後ろにいた外人に突き飛ばされる。

「オウ！アィムソーリーヒゲソーリー　ハハハハ！！」

末代まで崇ってやると決めた。何ちゃっかり日本のギャグ引用してんだよ。

重心が崩れ、視界がぶれる。何やらムチャクチャな予感が。

落下すると分かった時にはもう遅い。思わず声にならない叫びが半開きの口から漏れる。

何せこの姫路城の階段は敵の侵入を妨げるために角度ほぼ直角に近いくらいに作ってあるのだ。落下したら骨折どころではすまないだろう。

「キ…キヤアアア…！！」

視界がぐるりと渦を巻く、ひどく気持ち悪い吐き気、放り出される体。

まるで、排水溝に水が飲み込まれていくように――

階段から落ちるだけにしては感覚が変だ。こんな感覚、今までに味わったことがない。

その気持ち悪さに耐えきれず、紗那は思わず目をつぶる。

瞼の奥で、白い光が光った――

遠雷と桜（後書き）

こんにちは、浅葱と申します。『白鷺の砦』第一話を読んでいただきありがとうございます。この小説は二作目の連載です。

文章表現、情景描写など、全てが未熟な私ですが楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

私自身も、紗那と同じで城めぐり大好きです。姫路城もちろん行きました☆

そんな少し変わった私ですが、暖かい目で見ていただければ幸いです。

また、感想や指摘などしていただければ泣いて喜びますね。

現実と架空

「いったあゝ…」

下半身に衝撃が走った。どうやら尻もちをついたらしい。

だが、予想していた痛みよりはかなり軽い。階段の一番上から落下したはずなのに。

少し不審に思いながらも、立ち上がってジーンズについた泥をぬぐう。

「…さて」

母の後に続くか、と言いかけて紗那の動きが止まった。

そこには、人一人いなかったからだ。

さっきまでできていた長蛇の列は幻のように消えている。

それどころか、いやに静かだ。人の話し声も、車の走る音さえもない。

空気もとても綺麗。ほのかに鼻をつく二酸化炭素の臭いもしない。

ざあっ、と風が吹き、桜の花びらが舞った。

「……………」

一瞬何が起きたか分からないが、「きっと皆天守閣の中に入ったんだゝ いやゝ歩くの速いなゝ」

と無理やり納得する。

天守閣に入ろうとしたが、門が閉まっていた。

とても頑丈そうな木と鉄でできた門だ。

やっぱり不自然だ。さっきまでこんな門はなかった。というかこんなあったら観光客が中に入れない。

「……………」

二回目の沈黙。今度は「風で門が閉まったんだ」 いや／＼春一番つてすごい威力だな」
とまたもや無理やり納得する。

だが、この入口が開かないとなると、別の入口を見つけなければならぬ。

紗那は元来た道に戻ってみることにした。

歩いていると、やはり不自然すぎる。観光客はおろか、人の姿はない。

ただ、桜の木が悲しげに揺れるばかりだ。

それに、さっきから体の中から何かが湧き上がってくるような感覚がした。

（疲れたのかな？）

コキコキと肩を回していると、目の前に大きな屋敷が見える。西の丸だ。

（ここが千姫のために作られたっていう西の丸ね）

まじまじとそばに行って眺めてみる。やはりここも門が閉まっていた。

しかたない、と諦めて踵を返すと、遠くにうっすらと人影が見える。五人程度の集団だ。

（やっと人がいた！ これで少し安心ね）

人影に近寄っていくにつれ、妙なことに気がついた。

遠目だが、皆着物を着ている。下は袴だ。そして長い髪を後で結んでいる。

（何かのイベント？ それにしても大勢いるわね）

やっと表情が確認できるほどの位置に来た時、一人が紗那に向かって指を指した。

「おい」

反射的に手を振ってみた。相手もこちらに向かって来る。だが、なぜか表情が陰しい。不審そうに紗那を見ている。そして紗那までの距離が残り五メートルという所で停止した。

「そなたは誰だ！？ 名を名乗れ！」

大声で叫ばれ、一瞬戸惑う。なぜこの場で名？と思ったが素直に従ってみる。

「わ：私は紗那といいます、紅梅^{こうばい}紗那です」

すると、相手は驚いたように目をつり上げた。

「苗字を持っているということは、そなた武士の娘か！？」

は？うちの先祖は僧侶でしたけど、と言いかけ言葉を飲み込む。

絶対、状況がおかしい。演技にしてはなんだか本気^{マジ}っぽい。

状況を読み取り、考えられるのは：

「タイムスリップ！？」

そう考えれば説明がつく。人一人いないのは当たり前だ。門が閉まっていたのも納得できる。

常に門が開いていたら敵に攻め込まれるからだ。

「おい、どうした、なぜ何も答えぬ」

男の声で現実に戻された。

「やはり、こいつ敵の隠密です、斬りましょう」

男はそう囁かれると、では、と言い脇にさしてあった刀を抜いた。後の男達もそれに続く。

刀を抜く金属音が辺りに響いた。

「ちよっとまって、何が『では』なの！私は隠密でもないし第一あんたたち誰…」

先を言うヒマもなく数人が突進してきた。ようやく身が危ないということを察する。

迫ってくる男にたじろいでいると、脳裏に体操部で習った高度な技がひらめく。

（いちかばちか…!）

紗那はキッと向き直った。

男の肩に重心をかけると、大地を蹴って一回転。そして着地。

「なっ…」

驚く男達を無視して一目散に逃げ出す。頭と運動神経には自身があるのだ。

だが、振り切れるはずもなく、前から別の男達がやって来た。すぐさま紗那を囲む。

「こいつ、異人の娘ですぞ、身につけている者が妙だ」

そんな会話が聞こえた。

紗那の今日の服装は半そでのシンプルなTシャツにユ●クロで買った上着、そしてジーンズだ。

だが、紗那から見れば男達の方が変な服装だ。見たところ戦国から江戸初期の格好だろう。

分析していると、背後から気配がした。とっさに飛び退くと、刀が振り下ろされている。

「!!!!」

こいつら、自分を斬るつもりだと悟る。だが、ここで死ぬわけにはいかない。

「まだ歴史検定二級制覇してねえんだよ——っ!!」

叫ぶと、体に力がこみ上げる。とっさに自身の手を見る。

何かが宿っているようだ。力は溢れそうなくらい体に溜まっている。（この力を、外に出さなければ）

そして紗那が目を見開いた刹那――

『ドッカーン!!』

「!!」

閃光が走った。男達が吹っ飛ばされていく。まるで見えない力が君臨したかのように。

その隙をついて、走りぬける。脇目もくれず、ただひたすらに走った。

しかし、それも長くは続かず、何かに突進する。

あわてて顔を上げると、中年の男。藍色の着物を身にまとっている。下は袴、髪はやはり後ろで結んでいた。

それにしても、かなりの筋肉の持ち主だ。鍛え抜かれた体はがっしりと引き締まっている。

そのたくましさに一瞬見とれてみると、背後から気配がした。振り向くとあの男達。

「こ…これは三木^{みきのすけ}之助様！　いかがなさったのですか、このような所へ！」

一人が慌てて膝をつく。そしてそれに続くように全員膝をついた。

「いや、少し用があってな、それよりおぬし達、この者には手を出すな」

声は低く、がっしりとしている。その声に男達はしぶしぶ刀を戻した。

「下がれ」

一声かけると、紗那に向き直る。しかし紗那はポカンと口を開けるばかりだ。

（な…何この状況！？　まさか本当にタイムスリップ！？）

何が起こっているのか全く分かっていない彼女に、三木之助は口を開いた。

「千姫様——？」

現実と架空（後書き）

えーと、とりあえずこんにちは。浅葱です。

何だか良く分からないことになってしまいましたね！（お前が言うな）

友人にネタがないと泣きついたら、『何か謎の力が使える』という設定を持ちかけられたのでそうしてみました。

その謎の力の正体は次の話で説明する予定です。

何かよくわからない不思議な小説ですが、とりえあず引かずに読んでくださいね！

動揺と決断

「は…千…姫…？」

ポツリと漏らされた三木之助の言葉に紗那は顔を顰めた。その行動に三木之助は驚いたように目を見開く。

「何をおっしゃっているのですか、千姫様、城に戻りますよ」
そう言うなり、紗那の腕を掴む。

（えええっ！？　ちよつとまって…千姫って姫路城こじの姫様のことよね、何で私が！？）

紗那は思わず掴まれたがっしりした手を振り払う。

「あ、あのっ、人ちがいですっ！　私は紗那で、千姫ではありませんん！」

必死に説得しようとしたが伝わらない。三木之助は苦笑した。

「嘘をついてはなりませんぞ、姫様に瓜二つな人などこの世にはおりません」

「だっ、だから違いますっ！」

紗那の迫力に思わずビクツとすると、彼はまじまじと見つめてくる。

「うゝん…たしかに服装はだいぶ異なるようですが…」

辺りに風が吹き、桜の花びらが踊る。

「まあ、本物でも偽物でもいいので、とりあえず城の中へ」

三木之助がついておいで、という風に踵を返した。

紗那は迷ったあげく、ここに留まっているより城内の方が安全だという決断を下し、後を追う。

門が開き、天守閣の中に足を踏み入れてみる。

さっきとは違い、『頭上注意』という張り紙ももちろんない。

急な階段を上ると渡り廊下に出た。

廊下から見える中庭には桜の木が数本植わっている。
錦鯉の集まる小さな池。そして四季折々の樹木。

ここで紗那は初めて状況を理解する。

（多分、私は千姫様と容姿がにているんだわ、それで三木之助あのひとが間違えて…）

考えた所で、ハァーッとため息をつく。

実はこういう経験は初めてではなかった。

駅前をブラブラしていると、テレビ局らしき人達に声をかけられた事がある。

そしていつも決まって、『大河ドラマに出ないか』と言われるのだ。
紗那は生まれつきから古風な顔立ちだった。

それは嬉しい気もしたし、逆にコンプレックスでもある。

それが今回まさかこんな展開になるとは。

（本当、私ってついてないわよね…）

二度目のため息をつきながら三木之助の後を追う。

いくつもの階段を上っていると、ふいに気がついたことがあった。

三木之助の背中を見て思ったことだ。

（この人…ひょっとしてあの本多忠刻ほんただただときの側近！？）

本多忠刻は姫路の藩主で、この城の持ち主である。そして彼はあの二刀流で有名な宮本武蔵を迎えて師事し、家士をしてその流儀を学ばせた。また、それだけでなく、武蔵の養子・宮本三木之助を小姓として出仕させ、側近としたのだ。

（絶対そうよ！　じゃあこのままだと本多忠刻に会えちゃうかも！）
忠刻が美男だということを知っている紗那の心が躍る。

そして待望の時はやって来た。

「忠刻様、入ります」

三木之助が障子を開いた先に浮かび上がる一つのシルエット。
質素ですっきりとした部屋の中に彼はいた。

「どうした、三木之助、見つかったか？」

立ち上がった忠刻をこっそり覗きこむ。

輪郭がほっそりとしていて体全体にもムダな肉がない。鍛えている証拠だ。

鼻はスツと細く、瞳は険しいが、優しさがうかがえる。

忠刻の美男伝説は本当だったようだ。

（でも、見つかったかってどういうこと？）

彼の言葉に疑問を感じた矢先に、三木之助がぐいと体を押し出す。
勢い余って倒れそうになったが、何とかこらえた。

「こちらの娘でございま…」

「違うな」

言い終わる前に判断する。三木之助は紗那を押し出した格好のまま、
停止した。

「…えっと？」

「その娘は千姫ではない、『あの力』を持っているのは確かなよう
だがな」

何気ない一言だったが、聞き逃す訳がない。紗那は忠刻に質問する。

「あの力って…どういうこと？」

「おい、娘、無礼な！」

「かまわぬ、三木之助」

その場の混乱を一瞬で静めた彼は、紗那の目の前に歩み寄った。

「：聞きたいか」

「はい」

きっぱりと答えると、忠刻は苦笑した。

（本当に、千姫に似ておる：）

いきなり笑顔になった忠刻に少し引いたが、続ける。

「教えて」

遠い目を見ると、話はじめた。

「そなたは、この地の神の力を受け継いでおる、多分昔同じ力を持つていた僧侶の遠い子孫だろう」

たしかに、紗那の先祖は僧侶だ。

「神の力：って？」

「そのままの意味だ、自分の意思で自然のあらゆるものを動かせる、ただしその神の力は誠の志と勇気を持ったものにしか、一族の中でも使えないそうさ」

「で、でも、じゃあ何で今までその力が発動されなかったの？」

「神の力は姫路周辺でしか使えぬ、それにそなたの住んでいる未来ではかなりその土地の力が失われているのだ」

「え、待った！ 『そなたの住んでいる未来』 って、私がこの時代の人じゃないってことを知ってるの！？」

「うむ」

こればかりは、さすがの三木之助も目を見開く。

「何で：？」

「今朝、このような文が投げ込まれていた」

忠刻が懐を探り、紙を取り出す。すかさずそれを三木之助が奪った。

「何なに：『今日、この地にて神の力を授かる娘、未来から来たし』
：」

「おそらくそなたをこの地に呼んだ張本人だろう」

その言葉にびっくりして三木之助を押し倒す。

「で、でも、私は階段から落ちてここに来たのよ？　誰かに呼ばれたなんてことはないわよ！！」

「そなたが落ちたのは偶然ではない、その者が最初から仕組んでいたのだ」

思わず迫力で黙りこむと、押し倒された三木之助が起き上がる。

「なっ、なっ、ならば、どうして黙っていたのですか！？」

「そ、それは…」

いつのまにか部屋に夕日が射している。橙色に照らされた中で紗那達はゴクツと唾を飲む。

「忘れていた」

がくっ、とずっこけた。忠刻は案外天然なようだ。

「まあ、それは置いておくとして」

流した：紗那は心の中でつつこむ。

「今日からそなたは千姫の変わりとする」

「は、はあ！？」

つつこんでいる場合ではなかった。忠刻に掴みかかる。

「実をいうと、千姫は一カ月前から失踪中だな：必死に探しているのだが…」

忠刻は悲しげに目をふせる。

「そなたなら、容姿も似ているし、神の力も使える、問題ない」

「いやいやいやいやいや、ありまくりのありまくりでしょ！」

断るってば！

その訴えに、いたずらな笑みを浮かべる。

「未来に帰る方法がみつかるかもしれないぞ」

ピクツと、紗那は反応した。次の瞬間、満べんの笑顔になると膝をつく。

「おまかせください！」

だが、紗那は分かっていた。姫になることとは、どういふことなのか。

千姫は今、命を狙われている。

動揺と決断（後書き）

な、何か…紗那のキャラが完全に崩壊していますね。

しかもダラダラ説明長いし…

もう本当に読みづらくてすみません。

次回からはコメディ要素を入れて、もう少し明るくしていきます！

（と、宣言しといっても多分次の日には忘れているでしょう、チャン
チャン）

水面と春風

元和五年、春。

「…ん、朝…？」

小鳥の囀りと、障子から射す朝日に目が覚める。
眠い目をこすりながらも起き上がった。そして辺りを見渡す。

「……だよねえ」

畳に敷かれた布団に、壁にかかる掛け軸。そしてその下には生け花。
何一つ昨日と変化していない。

紗那は、姫路城で起こった出来事が夢だというわずかな確率を捨て
きれていなかった。

目が覚めたら全部夢だったくなどという展開を期待していたのだが。

「やっぱりこれは現実なのよね…」

悲しそうに立ち上がると、温もりの残る布団をたたむ。

華麗な花が描かれた押し入れの障子を開けると、布団をしまった。

そこで、紗那の視界に何かが入る。それは昨日自身が身に着けていた鞆。

きつと忠刻が届けてくれたのだろう。

おそるおそる鞆を開け、中を確認する。

まず始めに手に取ったのはケータイだ。なれた手つきでボタンを操作。

「電話帳…電話帳…あった、これね」

ドキドキしながら、母のケータイの番号を表示した。震える手を耳にあてると発信――

『プルルルル…』

コール音が鳴るたびに、つながるかもしれないという緊張感が高まる。

そしてその音が途切れる。

(まさか——！？)

『通話するには、次元が違います。元の世界にお戻りしてから発信してください。グットラック!』

「……………」

ケータイってそんな忠告までしてくれるんだな。　　すげえな。と思
いながら電源をぶちぎった。
どのみちこの世界では必要な物だ。

「失礼いたします」

「うっひゃあああああっ!」

突然障子が開き、思わず叫んでしまう。

乱暴にケータイを鞆に押し込むと押し入れを閉める。

「なっ…何!?　　奈阿姫^{なあ}っ!」

「その名で呼ぶのはよしてください。　　私はもう姫ではございませ
ん」

奈阿姫は豊臣秀吉の息子、秀頼と側室の間の子だったが、大阪夏の陣で家康に処刑されかけた。

そこを千姫が助け、自らの養女にしたのだ。

彼女にとって千姫は命の恩人だ。ここでは紗那の養女だが。

「そ、それはそうと何の用!？」

引きつり笑いを浮かべ、正座している奈阿姫に問う。

「お着替えです」

奈阿姫はきっぱりと、そして笑顔で答えた。膝までの長い髪が靡く。彼女は温厚な性格で、顔立ちはまあまあ美人だ。ただ、普段からあまり飾らないので、その魅力が発揮されることはない。

「えっ、着替えるの!？」

奈阿姫の答えにたじろいだ。この白い無地の小袖のままで十分だ。

「あたりまえですよ、寝巻のままで城内をうろつくなど姫として有るまじき行為です」

優しい声だが、有無を言わせぬ迫力だ。紗那はしぶしぶ従う。

(そうよね…今の私は姫だから…)

部屋を出て、廊下を歩く。奈阿姫が紗那を導いてくれる。

ここ、西の丸からの景色は絶景だ。けして高くない位置に建てられているが、眺めだけはいい。

建物を囲む大きな深い池。その中で悠々と泳ぐさまざまな魚。

そして前方には日本庭園。

見とれていると、奈阿姫が一つの部屋の前で停止した。

一緒に中に入るとそこには色とりどりの着物がかけてある。

「今日は、これにいたしますね」

楽しそうにその中の一つを手にとると、紗那に向き直った。

悪戦苦闘し、何時間もかけて着た無地の小袖が簡単に脱がされている。

新たに着用されたのは紅梅色の小袖だ。蝶や桜が付いている、春らしいデザインである。

帯が結ばれ、完成。

「できました！」

薄く化粧も施された。紗那はつくづくこんな面倒な物を毎日着ていた昔の人に関心する。

「さすが、奈阿姫ね」

気分まで有頂天になった紗那の顔に自然とえくぼができた。

笑いながらそのまま部屋を出てスキップする。

完全に『春先に多い危ない人』だ。

奈阿姫はそんな変態主人を呆れて見送った。

そんな変態主人——紗那は先ほど見とれていた庭園に來ると、足を止める。

もう一回、その秀麗な景色を眺めたかったからだ。

池の水面に映った自分を見る。

「…私、未来に帰れるのかしら」

このまま城に居たいという半面、帰りたいという気持ち^{みなも}が混ざり、今の自分は複雑だ。

それに、このままだと歴史を変えてしまう。いや、正確に言うと、ここに來た時点で歴史は変わっているのだ。

元の歴史に戻す方法はただ一つ、『自分が未来に帰る』だ。

「それができないから困っているのよね…」

水面に映る自分がため息をついた。

しかし直後、後ろから心配がする。振り返る気力もなかったので放置していると、背中を押された。

「え…っ!？」

一瞬、重心がぶれる。体が前のめりになり、足が地から離れる——

顔が水面に近づく。耳元を空気がかすめた。

「ちょ…ま…っ！」

紗那は、足がつくはずもない底なし沼に転落。

派手な音とともに水しぶきが上がる。そして辺りは再び静寂に包まれたのだった。

上から、紗那が沈んだのを確認した人物はまたたく間に姿を消した。

水面と春風（後書き）

更新、送れました。

すみません、すみません！

またしても読者の皆様の期待を裏切ってしまいました。

あく本当に私ってヤツは…

言い訳としては春なので、ポカポカして眠くなっちゃったりしてです
ねえ

『バツカモーン！』（天からの声）

????何、今の…

作者注）春先なので文章がおかしくなっています。

疑問と不安

水面に、波紋が広がる。

それは、一瞬の出来事だった。風が吹き、庭園の花が揺れる。

「…殺った…」

上から見下ろしていた人物はか細い声で呟く。
クツ、クツ、クツ、と自然に笑いがこぼれた。

「力を…神の力を…私は…！」

・・・☆・・・

水しぶきが上がる。体は水面を破り、池の中へと落下した。

「——っ！」

視界が閉ざされる。必死に目を凝らす、見えるのは濁った水と絡みつく藻のみ。

奈阿姫に着せてもらった紅梅色の小袖もずぶ濡れた。

「な…何でこんなことに…っ!？」

落とされる刹那、紗那は間違いなく誰かに突き飛ばされた。でも——

誰が、何のために——？

しかし考えている余裕はない。体は序所に沈み始めている。
必死に両手をかき、前に進もうとした。だが、思うように動けない。

腰の辺りに妙な感触がした。水中で確認する。

取り付けられていたのは、鉛だった。

（こんなの、いつ、どうやって——!?）

黒い球体を親指と人指し指でつまむ。

間違いない。これを取り付けたのは紗那を突き飛ばした張本人だ。だが、付けられた覚えがない。

できたとするなら、着替えたあの時。でも奈阿姫がそんなことをするはずがない。

（これがあるから、沈むんだわ!）

えいっ、と鉛を遠くに投げ捨てる。そしてすぐさま向き直ると、水面を目指した。

キラキラと光輝く水面までは相当の距離がある。もうそろそろ息が限界だ。

あわてて泳ぐが、藻が絡みついて動けない。振り払おうとするが、さらに絡みつく。

視界がぼやける。息が途切れ、大きな泡を吐き出した。

反射的に無駄だと分かっているにも胸に手をあてる。苦しい鼓動を抑え、最後の息を吐き出す。

鼻に、水が入ってきた。激しい衝撃に襲われ、目を閉じて――

（もう、駄目っ!）

手を翳した時だった。自身を光が包んだのは。

淡い光が全体を包み込む。まるで、紗那を守るように。

（これが、神の力——?）

ために頭で命令する、前進、と。すると光は水面を目指して進み始めた。

力は、一つだけではないようだ。

昨日、役人に襲われたときは『爆破』だったが、今は『光』だ。どうやらその時の現状によって変化するらしい。

手先に力が漲る。まるで、あの時のように。

いや、あの時より倍ぐらいの力が存在しているようだ。拳を作り、前に押し出す。

『助けて——』

呼吸が整ってきた。手足も、さっきより軽い。

視界が、激しい光線に包まれた——

ゆっくりと、瞼を開く。

「え…？」

視界に入ったのは、掛け軸と生け花、そして華麗な絵が描かれた押し入れ。

ここは、自身の部屋だ。

起き上がってみた。ざらざらとした畳の手触りが妙に心地よい。

「あれ、私…？」

必死に記憶をたどった。もしかして、あれは、夢——？
しかしぐっしりと水に濡れた紅梅色の小袖の感触に驚く。
やはり、あれは夢でも何でもない、現実だ。

「でも何でこんな所に…」
力のせいだろうか。まるで瞬間移動である。

テレビーション

トタトタと廊下から足音が聞こえ、聴覚が戻った。続いて障子が開く。

「紗那樣」

入ってきたのは奈阿姫だ。自身を見て、驚きの声を上げる。

「まあ、二度寝ですか！？ それにそのお服！ よっぽど汗をかかれたんですね」

いやいや、こんなに汗出ないから、と心の中でつつこむ。そして立ち上がった。

「ねえ、奈阿姫、あそこの池って…」

「あそこは入ってはいけませんよ！」
最後まで待たずに、奈阿姫は返答する。

「あの池は神聖な池です！ 紗那様の持つ、『力』よりももっと強力なものが溢れていますからね」

そういえば忠刻が言っていた。『力』は土地の威力が強くないと発動しないと。

（だから、私は助かったのね、多分…）

とにかく、さっきの出来事は奈阿姫達には言わないようにした。また厄介なことになりかねない。

（それにしても、私を突き飛ばしたのは誰だったの——？）

少し疑問と不安を感じながらも、紗那は奈阿姫とともに朝餉を食べ

に向かった。

・ ・ ・ ・ ・
☆ ・ ・ ・ ・ ・

「くそ…生きたか…運のいい奴だ」

その人物はチツと舌打ちをすると、廊下をゆく紗那を見つめる。

「…しかし、神の力、ますます欲しくなった…」

長い前髪の奥で、口元を僅かに上げる。

「手に入れてみせる、どんな手を使っても——」

最後の呟きは、妙に心に響いたのだった。

疑問と不安（後書き）

はい、今日は怒りの声が来ています。

面倒ですが、一つ聞いてやってください。

忠刻 「出番がない……………」

三木之助 「私もです…忠刻様…」

忠刻 「これも全部、あいつのせいだ…！」

三木之助 「浅葱め…私が成敗してくれるわ！」

何かインキャラどもが刀を抜いてぶつぶつ言っていますね。無視しましょう。

え、ちよつとまって、刀を突きださないで、先端恐怖症なのに…

あ、やだやだ、首にあてないで冷たいじゃん…ちよつと…

（以下、残酷な描写が含まれているため、書けません。）

安堵と悪寒

通された部屋は小さな、しかしどこか豪華さがあふれる個室だった。何人かの侍女達が、皿を下げに動きまわる。

城ほどではないとはいえ、ここ西の丸は妙に広い。

「ふう〜美味しかった…」

出された朝餉を、残すことなく平らげた紗那はお腹をさする。

ちなみに献立は、麦ごはん、まぐろの味噌汁、昆布と油揚げの煮物、ぬかみそ漬けの一汁一菜だ。

量はそれほどでもなかったのだが、普段朝食がパン一枚の紗那には十分だった。

「紗那樣、こちらのお皿、お下げします」

奈阿姫がそう言って茶碗を取った時、周りにいた侍女が不審そうにこちらを見ってくる。

紗那はその様子を見るなり、あわてて訂正した。

「ちよっ…皆私のこと千姫だと思っっているんだから、本名で呼んじやだめ！」

指摘されびっくりしたように口に手をあてると、あらあらすみません、と苦笑する。

（それにしても何で皆本物じゃないって気付かないの？）

そうなのだ。ここにきてからというものの、ほとんどの人が紗那を本物だと信じている。

今だってそうだ。朝餉を運びにきた奈阿姫以外の侍女はみな、

『まあ姫様！　しばらくお顔をお見せにならなかったので心配したのですよ！？』
と口ぐちに言った。紗那はそう言われるたびに苦い笑顔を浮かべたのだった。

「それほど似ておられるのですよ」
心の中を詠んだように奈阿姫がクスクスと笑う。そうかなあと言葉を返す。

「さ、朝餉もすんだことですし、気晴らしに庭園にでも行きますか？」

「えっ、行きたい！」

好奇心旺盛な紗那は思わず身を乗り出した。

千姫もこうして一日を過ごしていたのだろうか。そう思うと何だか親しみが持てる。

「ちなみに、千姫様の趣味って？」

少しでも彼女に近づいてみたくなったので、聞いてみる。

「えーっとですね…琴を奏でることでした」

「……」

自分にはとうてい無理だ。何せ紗那はスポーツ大好きなアウトドア派だからだ。

ふいに出てきた、夏休みに蟬を取りに近所の山に入り、探検しまくった記憶を頭の中から消去する。

「じ、じゃあ、庭園を眺めに……」
『ドッパーン！！』

言いかけて言葉が途切れる。目線の先は半分に切断された障子を持つ三木之助。

「おっと、また障子を割ってしまったな」

「あまり勢いつけて開けないでくださいませ」

奈阿姫が煙をはらい、破片を始末する。この光景はここでは日常茶飯事のようなのだ。

「…で、何の用？」

その光景に慣れていない紗那は半分言葉が遅れる。

三木之助はポリポリと無精髭をかいた。

「忠刻様がお呼びですぞ」

「忠刻様が？何の用？」

「何でも、行きたい所があるとかで…」

首をひねった。行きたい所？ 思い当たる節がない。

「まあ、とりあえず天守へ」

三木之助の言われるままに部屋を出た。奈阿姫の、いつてらっしゃいます。という声が耳に入る。

階段を下り、西の丸が出る。長く続く桜並木の道を歩くと、天守が見えた。

三木之助が門を開けてくれる。紗那は入った瞬間、激しく頭を強打したのだった。

（何で…何で、こんなことになっているの——っ！？）

天守に到着し、忠刻に会ったとたん、紗那は再び城を出させられた。先ほどとは違う、椿の花散る森の中を歩いている。

問題は、『忠刻と二人きり』ということだ。

彼氏いない歴十五年の紗那はこういった異性との経験がまったくない。

ましてや忠刻は超がつくほどの美男だ。その一つ一つの動作が優雅すぎるのである。

早くも、心臓の鼓動はピークに達し、着替えた小袖には汗だらだらだ。

砂利を踏み歩きながら、忠刻が口を開く。

「すまない、突然このような事に。見せたいものがあってな」

「いやいや、全然すむわよ！ もう食べた朝餉が飛び出しそう！！」
我ながら解釈不明の言葉を発しながら、必死に返事を返した。

午前の森は、温かみがある。木漏れ日がこぼれ、鳥のさえずりが耳に心地よい――はずだが。

現在の紗那は、全く周りの景色が見えていない。全神経を目に集中させ、会話を紡ぐので精いっぱいだ。

「ここだ」

忠刻の声で、ようやく我に返った。慌てて顔を上げると、赤い鳥居が視界に入る。

「ここ、は…?」

口を半開きにして鳥居を眺める紗那に目をやる。

「神社」

「いやいや、見てわかるって——」

「ただしそなたの先祖が建てた」

目を見開いた。忠刻の萌黄色の着物に掴みかかる。

「先祖って、神の力を持った僧侶のっ!？」

「物分かりがいいな」

いいものにも、紗那に力を与えた本人だ。忘れるわけがない。

「ここは、おぬしの先祖——かいらい權來が鎌倉の時に建てた神社だ」

風が吹き、新緑が揺れる。鳥のさえずりが、妙に遠くに聞こえた。

寂れているが、立派な彫刻が柱に施されている。中に祭られている人物、あれが自分の先祖。

おそるおそる、扉を開けようと、手を伸ばす。すると何かが舞い上がった。

「キャッ!？」

それは、短刀。同じく彫刻が施され、丁寧に赤い紐で結ばれている。

「自分の力に引くな。手に取れ」

浮遊する短刀を振るえる指で掴む。その重さに、時代を感じた。

「これ…?」

「そなたが持っている」

「で、でも…」

「その短刀は力を持った者にしか触れることを許されないと聞く。御信用にいいぞ」

それは、自分が命を狙われているという意味。背中に寒気が走る。思わず、短刀を握りしめていた。

「そなたなら、何とかなるであろう」

その不安を打ち消したのは、頭に乗せられた忠刻の大きい手。

「忠刻…」

優しい穏やかな瞳を見詰めた。自分は、彼の心にどう映っているのか。

紗那は微笑を浮かべると、両手を合わせ瞳を閉じ、参拝したのだった。

安堵と悪寒（後書き）

今回はちょこつと出番がありましたね、忠刻と三木之助！
（といっても三木之助はほんのちよつとでしたが）

ようやく春ボケから解放されました、浅葱です。
でも忘れてはいけない、次は五月病が来ます！

そんなわけで、今度更新が遅れていたら、
「あゝ浅葱は五月病なんだな」と暖かい目で見守ってください。

あれ？ でも今四月ですよ。
は、早くもボケが…

忠刻と政朝

城の中の一つの廊下。

そこは日が照ることはなく、一日中薄暗い。

そんな空気のせいかな、近づく者はいつしかいなくなった。

だが、今日、その廊下にヒタヒタと乾いた足音が響いている。

音の主は、突き当たりにある、使われていない部屋の黄ばんだ障子に手をかけた。

部屋を開けると、ほこりが舞う。つんとした臭いが辺りに漂った。しかし、それにも構わず、山積みになされた巻物の中から迷うことなく一つを引き抜く。

床に座り込むと、巻物を開いた。乾いた笑い声が暗い室内に響く。

「さあ……動け……力を……力を、我が元へ……！」

•
•
•
•
•

•
•
•
•

時は神社からの帰り道。いつしか朝は過ぎ去り、昼になろうとしていた。

太陽からの直射日光に眩しさを感じながらも、忠刻の後を追う。

昔の人は足が速い。歩くのも早歩き同然だ。紗那はさっきから小走りで急いでいた。

「ねえ、忠刻様……」

こちらを振り向く。あいかわらずの美男だが、太陽のため今日は特に眩しい。

紗那の先祖が建てた神社は、寂れているのに綺麗な一輪の花が供えてあった。

「あの神社は私が幼少の時から管理している」

指を折りながら数えていく忠刻を食い入るように見つめた。その顔は明らかに自分と同年代ぐらいだろう。

二十一

意味不明の声を上げ、思わず口を押さえる。

「若すぎでしょ!？ どう見たってお子様のくせに！ レストラン
でお子様ランチ食べているくせに！」
もはやただの負け惜しみである。内容が解釈不明だが。忠刻はあえ
てそこは無視した。

「でも私より、あいつの方が若く見えるぞ」
「え？ あいつって誰——」

続きは、「忠刻様——！」という三木之助の声に遮られた。
遠くから息を切らして走ってきたようだ。肩で息をしている。

「どうした？ 三木之助」
落ち着いた様子で忠刻に問われると、かなり慌てた様子で言葉を紡
ぎ始めた。

「そ、それがっ政朝様まさとくさがおいでに……！」
本多政朝——忠刻と三つ違いの弟だ。忠刻の死後、姫路の藩主とな
った。

「とりあえず城へ……っ！」

三木之助の言われるまま、紗那達は急ぎ足で昼の森を駆けた。

「……………」

三木之助に席を外してもらい、客間の障子を開けて飛び込んで来た光景は、予想外のものだった。

「あれー兄上ー？」

呑気に足を投げ出して座る人物こそ、本多政朝。その顔は、兄に似て美男だ。

だが、彼の着物は、なぜかボロボロで所々破れている。模様に描かれている鵲も悲しいほど汚れていた。

下は紺色の袴だが、こちらも同じく泥だらけだ。

そしてなぜか、部屋にある花瓶でお手玉をしている。

紗那は、隣から激しい『怒りのオーラ』を感じ取った。忠刻が政朝に掴みかかる。

「おまえ…何をしている」

凄まじい勢いにひるむことなく、政朝は手の中で花瓶をもてあそぶ。

「何って…お手玉ですよ、あ」

最後の『あ』という言葉と同時に手が花瓶から離れる。中を舞う花瓶。

「危な——い！」

紗那が手を伸ばした刹那、光が花瓶を包む。池に落ちた時と同じだ。

花瓶は光に包まれたまま空中を浮遊し、紗那の手に収まった。

たった数秒の出来事だった。だが、『力』に慣れていない政朝はた

だ驚きの眼差しで紗那を見つめる。
そしてしばらくの沈黙ののち、紗那を頭からつま先までまじまじと
観察した。

「…この子、千姫じゃないよね」

ああやってもうた——二人は心の中で絶叫する。

「何か、事情があるんでしょ？」

いやらしい笑みは、兄そっくりだ。忠刻はごまかしきれないということ
を悟ったのか、事情説明にかかる。

「…と、いうわけでなあ…」

たっぷり十五分間、物分かりの悪い政朝に説明し、疲れ切ったよう
だ。

この兄弟、性格はだいぶ異なる。

「ふうん、この子があのお僧侶のねえ…」

それに対し、政朝は元気だ。紗那の手から再び花瓶を奪おうとする。

「ちよっ…ダメよ！ またおっことしたりするでしょ！」

「いや、使えるかなーと思って」

「は？」

最後のは紗那と忠刻だ。まったく話がかみ合っていない。

二人の視線を感じ、政朝は言葉を紡ぎ始めた。

「いや、大したことはないんだけどあってさ…」

疑問だらけの言葉に首をかしげていると、政朝が長い人差し指を紗那に突き出した。

「場合によっては、君にも手伝ってもらおう」

忠刻と政朝（後書き）

新キャラ出ました、政朝です。

彼はけっこう好きなタイプですね。

どちらかというとこの小説は真面目さんキャラが多いので、政朝のようなこまったちゃん（？）は貴重です。

でも、今後その活躍が期待されることは多分ないでしょう。

（ああ悲しい…）

個人的にはもう少しいいじりたいですね。

視界と感覚

紗那はしばしの間、その突きつけられた指を見つめていた。

「……………え？」

「反応おっそい！ 君さあ、状況を理解してくれない？」

内心ムツときたが、怒鳴り散らす訳にもいかないので、黙る。

「お前が話さないかぎり状況が分からんわ」

隣にいた忠刻が気持ちを代弁してくれた。兄に睨まれ、政朝はしぶしぶ話し始める。

「もゝ皆読解力ないなゝ」

一番ないのはお前だバカタレと心の中でつつこむ。

「んとね、今僕の住んでいる方でなんかまあ、色々あってさあゝこうバサバサと…」

身振りも交えて説明するが、全く解釈不明である。

今にも刀を抜きそうな勢いの忠刻を隣で精いっぱいなだめた。

「とにかく、こっちにその子を寄こしてくんない？ 半日だけ」

説得力ゼロの政朝に言われ、はいそうですかなどと言う訳がない。

「理由を言え！」

「えゝ面倒くさいゝ」

紗那は兄弟二人のやり取りをハラハラしながら見守る。このコンビ、

心臓に悪いぞ！

「場合によってはねえ…」

見つめられて背筋に悪寒が走った。さっきまでのへらへらした風貌は消え去り、その眼差しは凍てつくほどに冷たい。思わず後ずさる自分のその行為を、政朝は見逃すわけがなかった。

「力ずくでも連れていく！」

足をさらわれ、重心が思わず傾く。視界がぶれ、ピントがあった時はもう政朝の腕の中。

「ちよっ…放して！」

「ダメ。君がいないと話にならないんだから」

そう言うと、窓に手をかける。木がピシピシと音を立てた。

「紗那！」

忠刻の両手は、むなしく空をきる。その様子を見て笑みを浮かべた。

「この子、紗那ちゃんていうんだ、ちよっと借りてくよ！」

政朝の足が、窓枠から離れた。髪が後ろに靡き、風が耳元で鳴る。見えるのは青い空。

「ヒッ…」

叫び声を上げようとした刹那、激しい衝撃とともに地に降り立つ。立っているのもままならず、身体がふらついた。

「ごめんごめん、ちよっと荒っぽかったな」

政朝が倒れそうな体を支えてくれる。そこでようやく視界がハッキリとした。

ここは、天守の裏側だ。見上げると、たった一つ窓が開いている。あそこから飛び降りたのだと確信した。

それにしても、かなり高い。ゆうに十メートルはあるだろう。政朝、またしても恐るべし。

「…さて」

突然石垣に生える茂みを探り始めた。紗那が不審に思い覗きこむと、そこには一体の馬が。

「あああんた、こんな所に馬を!？」

驚く紗那を無視して繋いであった紐をほどく。ようやく馬の全身があらわになった。

この馬、大きい。紗那のゆうに二倍はあるだろう。色は黒で、所々茶色が混じっている。

「よしよし、いい子だ」

ペロペロと政朝をなめる。優しい瞳だ。どうやら、飼い慣らしているらしい。

しかし、政朝の表情は役人達の走ってくる足音で一変した。すぐさま慣れた手つきで馬に飛び乗る。

「乗れ!」

「え、でも…」

「早く!」

戸惑っていると、役人が背後に忍び寄り腕を掴む。紗那は反射的に

足を上げ、相手の腹に叩き込んだ。

「グッ…」

馬の上から舌打ちが聞こえたのと同時に、手を掴まれ上にひっぱられる。気がついた時は政朝の隣。

「行け！」

手綱を引くと、馬が鳴き声を上げ疾走する。傍にいた役人が慌てて散りはじめた。

またしても頭がグラグラする。風が頬をくすぐっては逃げていき、景色が流れる。

馬に乗ったのは北海道旅行に行った時だけだ。しかももっとスピードは遅かった。

「ふう〜あつぶなかった〜」

自分の今の状況の方が危ないわ、とつつこむ。馬は早くも城の出口付近だ。

果てしない不安と目まいを抑え、背筋を伸ばし、力をぬく。こうした方がバランスが取りやすいのだ。

そしてだいぶその感覚と速さに慣れてきた時、前に座っている政朝に動きがあった。

「あっちゃあ〜来ちゃったよ、お役人さん…」

そう言いつつ額を抑える。言葉につられて首を伸ばし前を見ると、何人かの役人が道をふさいでいる。

「しょうがないなあ〜しっかり掴まっててよ？」

内心、すごくやな予感がしたが、いわれるままに政朝の腰を掴む。それにしても、この時代の人達は本当に鍛え抜かれた体をしている。

政朝も無駄な肉がない。

「どけえ！」

ふいに、怒声混じりの叫び声がした。とっさに目をつぶると体が回転する。

（たーすーけーてー！！）

目元が涙で濡れる。その感覚は数秒続き、目を開けた時はもう城外。

顔を上げると政朝がにんまりと笑みを浮かべている。

「強行突破、成功。なーんちゃって☆」

「前向いて前——！！！」

紗那の悲鳴は城外の森に響き渡った。

視界と感覚（後書き）

何かすごいですね、この話…

もう完全に別ものですね、ハイ。

政朝、大活躍！それに対し、奈阿姫や三木之助は…
いつか活躍できることを願います。

呆れと驚き

「行ってしまったわれましたなあ……」

三木之助が障子を開け、部屋に入る。窓によると、外の穏やかな景色を見つめた。

横目で忠刻を見ると、額を抑えうずくまっている。

「いいのですか？ 追われなくて……」

「かまわぬ」

予想外のハッキリした返事に少し驚く。

「あいつはああ見えても武術にはかなりたけている。 紗那を危険な目にあわせることはまずないだろう」

忠刻がむくりと立ち上がる。三木之助の隣にいくと、ポツリと言葉を漏らした。

「夕餉までには帰れよう」

忠刻と政朝は似てなさそうで、似ているのだと、三木之助は思い、微笑を浮かべたのだった。

周りの景色はいつの間にか、森から村へと変化していた。流れるのどかな村の風景を、すっかり馬に慣れた紗那は観察してい

る。

ただひたすらに馬の手綱を握る政朝の腰を掴みながら。

「ここは…?」

小さな村だ。それに畑を耕す村人達も何だか生気がない。

政朝がニッと笑う。

「紗那ちゃん、君って本当反応遅いよね。もう村に入ってから大分経つけど?」

「うるさいっ! ここはどこって聞いているの! それに馴れ馴れしく名前で呼ばないで!」

グラグラと馬が揺れる。政朝は無意識にため息をこぼした。

「紗那ちゃんは…十五歳だっけ? 年上には礼儀正しくするもんだよ」

「なっ…年上って、あんた何歳のわけ? どうせ一歳ぐらいしか違わないんでしょ!」

その罵声を聞き、今までで一番いやらしい笑みを浮かべる。

「僕は二十だけど?」

「はあああああああああつ!」

全身が凍りついた。まさか五歳も年上だったなんて。その知能はどう考えても園児並だ。

自分のプライドがズタズタになり、がっくりと肩を落とす。

(そっか…忠刻様が二十三歳で、三歳違いの弟って言ってたから、当然二十歳なんだ)

「ってことで、これから紗那ちゃんは僕の下僕だよ☆」

『ドガガガガッ!!』

瞬時に拳を叩き込んだ——つもりだったが、それは政朝の片手によってあっけなく阻止されている。

「!!」

「ダメだよ、暴力は」

いやいや、その笑顔の方が怖すぎてダメだろ。

それにしても、体操部一の筋力と瞬発力を持っている自分の拳が片手で防がれるなど初めてだ。

紗那はこの時初めて政朝の『すごさ』を目の当たりにした。

「まあ、もう着くし、おとなしくしててよ?」

拳をそつとはずすと、馬を停止させる。そして地面に降り立った。

まだ動揺が収まらない心臓をおさえながらも、政朝に続く。久しぶりに降りる地面は新鮮だ。

「あ、その子、その木に繋いでおいて。これから何かと危険だから」

最後の言葉に違和感を覚えながらも、固い手綱を幹に縛る。そこで紗那は初めて周りの風景を見た。

四方に連なる小高い山。それに囲まれた平地。元畑だったのか、土が柔らかい。

そして目を引くのは前方にある大きい池だ。平地の半分を占めている。

その池のほとりの看板には、読みづらい走り書きで、『近づくべからず』と書いてある。

「何、ココ…人いないし…」

それは、どこか不気味さを漂わせている。たしかに近づくのもため

らうだろう。

「じゃあ、事情を説明するか」

政朝が傍にある石に腰を下ろした。春とは思えぬ冷たい風が頬をなでる。

「ここは僕が住んでいる屋敷の隣の村。屋敷からもこの池は見えない」

自然と、喉が上下する。

「だが、今朝、この池のほとりで妙なことが起きているんだ。漁で池に近づいた男や、水を汲みに来た女がことごとく消失しているか、もしくは重症を負っている」

「えっ：『近づくべからず』って看板あるのに！？」

それに対し首を横に振る。

「あの池は、元畑だったからだ。農作物を荒らさぬように農民が立てた」

政朝が目を細め、池を見やる。

「だが、それが本物になろうとしている…」

紗那は慌ててなだめた。

「何か原因があるんじゃないの？」

「寺の物が来て、見た所、邪悪な物が取り付いているらしい。どうやら何者かがわざと取り付けたらしいが」

何やらとてつもなく嫌な予感がしてならない。震える声を抑え、聞いてみる。

「で、それが私とどんな関係が…？」

立ち上がった政朝は、鼻と鼻が密着しそうなほどまで近づいてきた。

（は、はいっ！？）

頭はアレでもかなり美男だ。心臓が跳ね上がる。

鼓動が速まる紗那に、政朝は微笑を浮かべた。

「邪悪な物を、神の力を持つ君に取り除いてほしい」

その時の紗那の表情は、怒りと驚きと呆れが混ざった複雑な表情だったという。

呆れと驚き（後書き）

作者注）紗那や政朝達の歳は、数え年ではなく現代の歳の表し方です。

それは何故なのかというと、作者が単に面倒くさがってるだけなのでした。

（政朝派の作者、只今爆走中！）

えーと次は少し更新が遅れるかもしれませんが、気にしないでください。

またいつもの春ボケかよーと軽く流してくださいね！

池と侵食

森が、唸る。

一陣の風が、草原や池の水面みなもを靡かせた。

午後の太陽は輝きを増し、木漏れ日が降り注ぐ。

辺りは、異常なほど静寂に包まれている。

「……ダメ？」

その静寂は、政朝の軽い声によって破られた。
数泊遅れて紗那が言葉を発する。

「ダ：ダメに決まっているでしょ！？ そんな、私なんかが……」

「君じゃなければこの池は助からない」

きっぱりと言われ、思わず返事に困る。しかし、負けじまいと紗那も粘った。

「そんな勝手よ！ 急に言われても、困るのが普通じゃない！」

しかし、齒向かう声にも構わず得意な『いたずらな笑み』を浮かべる。

「あっそ。 なら、お役人さん達に君が千姫じゃないってこと言っちゃおっかな／＼バレたらただじゃあすまないよね／」

自然と、頭の血管がまとめて切れた。

（こいつは……まったく……！！）

気がついた時には、忠刻からもらった護身術用の刀のさやに手をか

けていた。

自分でも信じられない勢いで政朝に突進する。

だが、政朝は懷から派手な扇子を取り出すと、身をひるがえし刀に向かつて叩きつけた。

刹那、紗那の両腕からは刀は消えており、見れば遠くの地面を貫いている。

――すべてが、一瞬の出来事だった。

啞然とする紗那の脇を通りすぎると、刺さった刀を引き抜く。

「言ったでしょ？ 武術では僕にかなわないって。 ハイ、これ」
両手に再び刀を握らせる。

「――この刀は、今のように使うべきではない。 君だって分かっているんでしょ？」

(え!?)

囁かれてとっさに振り替えると、政朝の顔を凝視した。

だが、その面に囁いた時のような真剣さはなく、いつもの顔だ。

「さうて。 分かったところで、さっそくやってもらおうか」

(何...? さっきの言葉の意味...)

疑問を覚えながらも、今は池を救う方が先だ。 ゆっくりとその水面に近づく。

自分が映っている。 その瞳は悲しげでもあり、驚きでもある。
いや、そんなことよりも早くこの池を救わなければ。

「で、どうやれば…」

何気に振り返ると、そこに政朝の姿はなく、目をこらすと遠くの茂みに隠れていた。

「……ちよつとまで！ 何であんたそんな遠くにいるのよおお！」
「だって怖いじゃん！ 何が起こるか分かんないんだろ！？」

絶対いつかこいつを倒してやる——脳裏をそんな呟きがよぎったが、あえて無視する。

もう一度、池に向き直ると呼吸を整え、瞳を閉じた。

感じるんだ、あの時のように。力を——。

両手をいっぱいに開くと、ゆっくり前方に翳す。

「はあああああああ！！」

しかし、紗那の寸劇もむなしく、何も起こらない。ただ水面が風になびくだけだ。

「……………」

はてしなく自分が馬鹿に思えてきた。

「ちよつとおおお——！ 何でなにも起こらないの——！？」

「……ん、僕に聞かれてもね」

そういえば、忠刻が言っていた。神力は自分が危機に陥らなければ発動しないと。

（いくらやっても無駄ってこと…？）

この力、扱いが難しすぎる。なぜ、肝心の時に発動しないのか！
「あゝもうっ！」

小袖を返すと、政朝の方角に向き直る。

「こうなったら、最後の手段よ！」

「は？」

不思議にあふれる顔に近づくと、人差し指を向ける。

「政朝、あんた刀で私を斬るフリをしなさい。あくまでフリよ」

「……そんなんでよいのか？」

「ものは試しよ！ さっさと刀抜きなさい」

五歳も年下の娘にビシバシと指示を出され、言われるとおりにする。

「あ、あと紙とペン……じゃなくて筆持っていない？」

「小柄なものなら……」

まるで懐からド●エモンのポケットのように色々と物が出てくる。

紗那は半分呆れた。

そして慣れない筆でサラサラと寸劇の『台本』を書く。

それを乱暴に政朝に押し付けた。

「いくわよ」

「あ、ああ……」

風が、葉を巻き上げた。ザアツと、一瞬お互いの顔が隠れる。

『お、おまえにはここで死んでもらう！ フハハハ……』

『だ、誰か助けて！ キャァー！』

二人がこの超馬鹿な行動に気付くまであとどれぐらいかかるだろうか。

『と、とにかく地獄へ行きやがれ——！』

台本通り、政朝がつかに手をかける。そして突進——

（ここで、たしか私は悲鳴を上げて…）

構成を脳裏に思い浮かべていると、背後に動くものの気配が。政朝かと思ったが、違う。今彼は目の前で演技をしている。

頬を汗が伝った。まるで、体を侵食されるような、そんな憎悪が渦巻いて——

鼓動が速さを増す。半開きの口から、声にならない叫びが漏れた。

『力だ…私の…新しい神力…！！』

頭の中に声が響く。そして上がる水しぶき。

「キャアアアアアアア！！」

「紗那！？」

政朝の視界が水で覆われる。ずぶ濡れになった袴にも構わず、目を見開いた。

——彼女が、いない。

池と侵食（後書き）

祝、十話目です。

なのに更新が遅れて本当にすみません！まあ春ボケというのもありますが、個人的に色々忙しく…と、いうのは置いておきます。

えーと私の話では毎回、ゼロがつく話までいったらキャラクターにインタビューをするという画期的（？）な企画をやっております。なので白鷺でも少し。

浅葱 「どうですかね、この話は」

奈阿姫 「完全に作者のえこひいきで私の出番が減っているのは全然気にしていま せんわよ☆」

浅葱 「ぐっ…そうきたか、いきなり痛いなあ…」

三木之助 「そうですね、忠刻様や私も同感です」

紗那 「話変わるけど、私っていつになったら帰れるの？」

浅葱 「一生、出れませんよ（小声で）」

政朝 「まあまあ、あまり怖がらせちゃダメだよ 平和に行こうね」

全員 「お前が言うな！」

…とのことでした。随分長くなってしまいましたが、これで。

また更新遅れても気にしないでください！

靄と光

漆黒の世界が広がる。

暗く、重い世界に落とされた紗那に絡みつく黒い物体。どうやら随分深い所に沈んだようだ。

「————っ！」

息をするのもままならず、そんな声しか出ない。

両腕が物体によって浸食されていく。

悲鳴を上げようとして口をいっぱいに開くと、薄紫色の泡が吐き出された。

一寸先は闇——まさにその通りだ。暗い空間では、何一つなすすべがない。

春だというのに、池の水温は驚くほどに低かった。凄まじい痛みが全身を貫く。

唯一、侵食されていない左手を翳した。だが、辺りには何の変化もない。

（神力が奪われていく——！？）

考えようとしたが思考回路が閉ざされる。もはや、鮮やかな色の小袖にまで物体は侵食している。

とにかく、今はここから脱出しなければ息が持たない。実際、すでに限界だ。

そう願った刹那、漆黒の空間に声が響いた。低く、憎悪に満ちた声

『力…その神力を…私に…！　そうすれば…主に届けられる…！！』
はつきりしない意識の中でも、「その言葉」は耳にひっかかった。
ほぼ残っていない最後の息を必死に押し出した。それは声となって
辺りに漏れる。

「主…？　あなたには…主が…いる…の？」

紗那の予想だと、それは池に悪しき物を取り付け、自身を殺そう
としている人物だ。

限界の息をも吐き出し、ガホガホと泡を出し続ける様子をあざ笑う
かのようにその声は響く。

『それは生きてから問うことだな…お前はじきに死ぬ…！！』

目を見開いた。霞む景色に、くれない紅色の靄が見える。

意識が途切れる。侵食は顔近くまできた。苦しさがフツと消える。

「私は…まだ…死ねない…！！」

ふと、手に触ったのは短刀。神社で忠刻に託されたものだ。

最後の力を振り絞り、腰の帯から刀を抜く。握りしめた時、神力が
体を駆け回る――

「はあああああああ！！」

パン、と光が舞った。それはヒラヒラと花びらのように浮遊し、紗
那を包み込む。

意識が戻り、瞳に生気が宿る。いつしか、全身を侵食していた黒い
靄は消えていた。

呼吸が軽くなり、自由の身だ。手に持っている刀が存在感を増す。

『馬鹿な…！ 池の呪いを破っただと…！？』

驚く声の主——紅色の靄を見据える。

「おおおおお！！」

光に近いスピードで池を移動する。靄に向かって刀を向けた。
淡い青色の輝きが刀を包む。そして靄を貫く——

『ギャアアアアアア！！』

凄まじい悲鳴が池を駆け巡った。靄はまたたく間に縮んで、消える。

視界が、琥珀の光に満たされた。

．．．．．☆．．．．．

水面が光る。

「あれ？ なんか池の色変わってない…？」

政朝は濡れた身体を池へと近づけた。さっきまでどよんでいた水が、
光輝いているからだ。

よく見ると、淡い光の粒が無限に散らばっていた。思わず微笑を浮かべる。

「はっはっ、あの子、やったね」

呟いたと同時に、背後に気配がした。振り向くと、予想通りずぶ濡れになった紗那がしゃがみ込んでいる。ゆっくりと近づくと、懷から手ぬぐいを取り出した。

「いやよくやったね、紗那ちゃん」

頬をぬぐられた紗那はせき込むと、言葉を紡ぎはじめる。

「この…刀が…私を守っ…てくれ…て」

再び激しくせき込む紗那の小さい背中を優しくさすると、政朝は池に向き直った。

「なん…ですか？ それ…」

手にしているのは花瓶だ。政朝の顔ほどの大きさがある。鮮やかな模様も施されていた。

「うん？ ちょっとね」

そう言うと、池の水をすくった。光の粒がまたたく間に花瓶に吸い取られていく。

それは、流れる天の川のごとく花瓶に向かって流れ続ける。

そして光が途切れると、政朝は花瓶に栓をして懷にしまった。

「…今のは？」

半分放心状態の紗那の顔を直視すると、花瓶をヒラヒラと振る。

「封印終了。 こういう悪質な物は封印しないと祟りが怖いからね」

その言葉に、頭の奥で何かが光った。

初めて政朝に会った時、花瓶でお手玉をしていた。あの時は単にふざけているだけと思い、花瓶を取り上げたら彼はこう言った。

『いや、使えるかな〜と思って』

あれは、こういうことだったのか。悪質な物を封印するために：納得したという顔に笑みを向けると、政朝は馬のいる場所に向かって歩き出す。

「じゃ、そろそろ帰ろっか。そうしないと忠刻様に怒られちゃうからね」

「え、でも服が…」

紗那の小袖はみごとにびしょびしょだ。こんなので馬に乗ったら政朝まで濡れてしまう。

「だーいじょうぶだって、ちょっとぐらい濡れても。ホラ、乗るよ」

紗那はあわてて片手で湿った下駄を掴むと、素足で政朝の場所へと駆けた。

．．．☆．．．

そんな二人の様子を影から見つめる人物は、悔しそうに歯ぎしりをした。

ダン、と傍にある木に殴りかかる。葉が数枚舞った。

「そんなバカな…！ あ呪いを打ち破るなど…！！！」

肩で苦しそうに息をすると、幹に寄りかかる。

「次の手を…早く打たなければ…神力を…！」

そう決意すると、片手を翳す。手のひらに光が溢れる。

刹那、その人物は消えた。

残された木は、悲しげにザワザワと葉を鳴らしたのだった。

靄と光（後書き）

最近、小説を書きながら音楽を聴くのにハマっています。

よく聞く曲としては、2010年の大河ドラマのオープニングなど…

大河ドラマならではの独特の曲、好きですね。

私的には2009年の良かったんですけど。

何か久々にまともな後書き書きました。これまでハチャメチャだったのに…

では、これにて失礼します。

月光と闇夜

夕日が、遙かなたの山に落ちる。

辺りはたちまち薄暗しさを増し、三日月が顔を出した。暗闇に包まれた城の庭園では、虫たちが競うように鳴く。

ようやく長い一日が終わったのである。

一日の終わりには、どっと疲れがにじむ。紗那は部屋の畳に大の字になって寝た。

淡い蝋燭の光に顔が照らされる。

「…疲れたあ…」

朝は沼に落下し、午前は忠刻と二人きりで心臓破裂、午後は政朝とともに池をはらいに行って…

考えるだけで疲れてきた。これらの出来事が一日で起こったと思うと寒気がする。

ふと気がつけば、タイムスリップしてまだ二日しか経っていない。

「あゝもう…何なのよ…」

家ではない場所で寝るのももう慣れた——つもりだが、今さらホムシクだ。

急に胸が締め付けられ、喉の奥から熱いものがこみ上げてくる。

「————ッ！」

泣いてはいけない。自分らしくない。
頬をばちんと叩くと、キッと立ち上がった。

——でも。

『本当の自分』とは、何なのか？

自分は、人とは異なる神力という能力を持っている。例えるなら、心の奥底にもう一人の闇の自分がいるような——

時々、怖くなる。この力が、いつか暴走してしまうような気がして…

「紗那樣〜」

その思考を遮ったのは奈阿姫の声だ。あわてて深刻な面を笑顔にすると、障子を開ける。

「何かしら？」

「えっと…夕餉のご支度ができましたので…」

その言葉と同時に、お腹が鳴る。奈阿姫はプツと吹き出した。

「す、すみませ…」

最後まで待たずに苦笑する。自然と顔が火照った。

「ホラ、さっさといくわよ！ 私昼はなにも食べていないんだから！」

そうなのだ。政朝の一件に巻き込まれ、食べ物はおろか水さえ口にしていない。

普段間食しまくりの紗那にとって、これは相当こたえる。

一歩進むごとに腹が鳴るのにこらえきれず、廊下を乱暴に走った。

月光は輝きを増し、闇夜は深まっていくのであった。

・・・☆・・・

深夜――人の足音はもちろん、物音一つしない。
虫たちの鳴き声は勢いを増し、庭園の沼に強烈な光を放つ月が浮かぶ。

そんな闇一色の空間に、ギシギシと廊下のきしむ音が響いた。
その足取りは西の丸の一番奥――紗那の部屋へと向かう。

手に持つ蠟燭の明かりが乱れた呼吸により、陽炎のごとく揺れる。
その人物は、女人しか入れないはずの西の丸の構造を確実に知っていた。

迷うことなく紗那の部屋のつきあたりまで進む。

角を曲がった時、足取りが急に停止した。

彼女の部屋の障子が、ほんのりと橙色を帯びている。蠟燭をつけている証拠だ。

まさか――他に誰かいるというのか。

動揺を隠しきれず、障子の隙間から内部の様子を覗う。

確認できる人物は一人だけだった。乱れた布団の中で、なにやら作業をしている。

彼女は、苦虫をつぶしたような顔になると、持っている物を放り出す。

「あゝあゝ充電切れちゃったかあゝいつもの癖で携帯チェックしちゃうんだよね」

——意味はよくわからなかったが、とにかく今彼女は一人だ。

蝋燭を吹き消すと、障子に手をかける。だが、中で立ち上がる気配がした。

「…誰かいるの？」

目を見開く。まさか気付かれるなんて。『力』で気配は消しているはずなのに。顔を見られたら終わりだ。とっさに姿を透明にする。

障子が開き、彼女が周りを確認する。誰もいないのを確かめると、踵を返した。

——今だ。

手のひらを翳す。黒い霧が彼女の体内に溶け込む——はずなのに。

——何故、何も変化しない。

まるで見えない壁が彼女を取り巻いている、とでも言うのか。軽く舌打ちをすると両手を振り上げる。先ほどよりも邪悪な霧が襲いかかった。

頬に入り込む。その場所から紅色の液体が滴った。

「！！
痛ったあゝ何で切ったんだろう？」

バカな、その程度か！？　なぜもっと激しくならない。

もう一度力を集めようとした。だが、それは全身の凄まじい痛みによって中断される。

「ぐ…あっ…！」

頭をおさえて膝を折る。口元から血が垂れた。

「…う…ここ…まで…か」

その人物は口を押さえながら闇の中を這うようにして進んだのであった。

月光と闇夜（後書き）

ガーン…大ショックです。事件です。

お気に入りが一件減ってしまいました。

ただでさえボロボロの物語なのにこれから先が心配です…

登録してくれている方お願いします。お気に入りから外さないでください！（涙）

…とまあ頼んでもしょうがないので置いておきます。

またしても更新が少し遅れました。その間、何をしていたかという
と…

絵を書いていました。

………。あーもうバカバカ！そんな間抜けだからお気に入りが減っ
ちやうんだよ！

えーとちょっとヒステリックになっておりますので（笑）気にしな
いでください。

私のバカすぎる後書きにつきあっていただきありがとうございます
た。

では。

朝日と稽古

白鷺の城が橙色に染まる。

長い夜は更け、朝になろうとしていた。鳥の規則正しい鳴き声が耳に心地よい。

城で朝日を眺めるのは二回目だ。

あまり寝つけず、早く目が覚めてしまった。寝巻のまま廊下に出ると朝日を浴び、背伸びをする。

寝つけなかったのには理由がある。昨日の夜、寝ていたら廊下に心配がした。

しかし確認してみると誰もいなかったのだ。

「何だったのかしらね…迷惑な…」

眩きながら深呼吸をする。

姫路の空気は澄んでいて気持ちがいい。車が走っていないせいか臭うのは若葉の香りのみだ。

きっと昔はどこもこのような感じだったのだろう。

一人で体操をしていると、廊下から軽やかな足音が響く。足音の主は予想ができた。

「奈阿姫、おはよう」

「おはようございます」

丁寧に頭を下げてくれた。にっこりした笑みを浮かべると布団をたたみに紗那の部屋へと入る。

城の人々は起床が早い。朝日が昇り始めたころだから今は約六時ぐらいだろう。なのに遠くから沢山の侍女達が行きかう足音が聞こえる。

「そういえば」

ふと、紗那が何かを思い出したかのように手をぽんと打つ。布団をたたみ終わった奈阿姫は不思議そうに先の言葉を待った。

「忠刻様に会ってもいい？」

「え？」

思わず奈阿姫の口から驚きの声が漏れる。すみません、と慌てて口をおさえた。

「ホラ、昨日忙しくて政朝に連れ去られてから会ってないでしょ？朝の挨拶もかねて色々」と

「そんなにお会いしたいのですか？」

いたずらな笑みを浮かべて奈阿姫が茶化す。紗那はとっさに弁解した。

「ちちちちちちち違うわよっ！ただ、元気かなーと思って！深い意味はないの！」

慌てぶりが逆に怪しすぎる。奈阿姫もそれを理解したのか紗那の手を取った。

「忠刻様は近くの東御屋敷にいらっしやいます。ぜひ、いつてらっしゃいませ」

その言葉に紗那は顔が紅潮しているのにも構わず首をかしげた。

「え…忠刻様って天守閣に住んでいるんじゃない？」

「いいえ、政治や仕事まつりごとをこなす時は天守ですが、それ以外は屋敷に

お住まいです」

知らなかった。関心しながら握られた手をそっと放す。

「ありがとうございます、奈阿姫。私、行ってくる」

「おまちくださいませっ!」

突然声を荒げられ、びっくりして振り向く。奈阿姫はなぜか顔を真っ赤に染めていた。

「…その格好で行くおつもりですか?」

とっさに言われて自身の服を見ると白い小袖の寝巻のままだ。このまま忠刻の屋敷に行けば変な噂がたつに違いない。

さっきの数倍頬が赤らむ。

「…せめて、お着替えください!」

紗那は無言で着替えのため、室に入った。

新鮮な空気を吸いながら外を歩く。ここは屋敷に行くための道だ。木漏れ日が紗那を照らす。周りは竹林で囲まれていた。鶉ひよどりの鳴き声が響き渡る。

「…本当に、のどかね」

自然と顔がほころぶ。これほど気持ちの良い朝は初めてだ。

少し進むと、視界が開ける。物静かな空間に、一件の屋敷が建っていた。

決して大きくはないが、とても迫力のある風貌を漂わせている。

「すみませうん」

入口に立つと、おそろおそろ呼んでみた。中から威勢のよい足音が響く。

ガラッと障子を開け、三木之助が出てきた。予想外の客人に戸惑っているようだ。

「えっと…忠刻様に会いたいですけど…」

三木之助が頭からつま先までまじまじと眺めてくる。

今日の小袖は梔子色に、竹の柄が施された落ち着いたデザインだ。

おかしい所はないはずである。

やがて三木之助はにかつと笑うと、

「そうですか？そうですか？そうですか？」
と連発しまくった。少し気味が悪い…

しかし紗那が不審に思っているのにも気付かない様子で部屋まで導いてくれる。

屋敷の内部は、古い年月を感じる。でも、不思議と寂れてはいなかった。

「こちらです。では、私はこれで」

そそくさと帰ってしまう。一体何なのか——そんなことを思いながらも障子を開けた。

「紗那か」

忠刻は驚いた様子も見せず、座布団から立ち上がる。紗那は慌てて障子を閉めた。

忠刻の今日の服装は黒の着物に優雅な花があしらわれた物だ。下は梱の袴を着用している。

目のやりどころに困っていると、忠刻に話しかけられる。

「どうだ、城での生活には慣れたか」

あんたにはまだ慣れてないけどね、内心そう思ったがうなづく。

話題を変えようと、紗那は言葉を紡ぎ始めた。

「千姫さん：見つかった？」

千姫――それだけの単語に、忠刻の表情が変化する。とたんに辺りの空気が重くなった。

「いや：まだ、何も：」

ため息を吐き出す忠刻に、紗那は必死に言い直した。

「げ：元気だしてよ、その内見つかるって！」

「：ああ」

――地雷を踏んだ。この空気には耐えられない。

「こそ、そういえばっ！」

またもや話題を変える。忠刻は顔を伏せっぱなしだ。

「政朝様はどこに？」

その瞬間、瞳に殺気が宿った。ゆっくりと顔を上げる。

「そなたを送り届けた後、帰った」

二回目の地雷――そういえばこの兄弟、仲むつまじいとは言い難い。
(えーっと、えーっと、えーっと！ 次の話題ー！)

紗那はこの空気を変えようと必死に全神経を脳に集中させた。しかし、意外にも話題を切り出したのは忠刻の方だった。

「そなたこそ…」

「は、はひふッ!？」

いきなり見つめられて意味不明な声を漏らしてしまう。鼓動の速さは並ではない。

(そういえば、今って二人きりよね!?)

神社に向かった時も二人きりだったが、今回は個室でだ。何が起こるか分からない。

「……………ッ!!」

思わず声を上げてしまった。必死にそれを咳で誤魔化す。

忠刻は不思議に思っているようだが、構わず続けた。

「大事ないか? 誰か見知らぬ者に襲われたり…」

「だっ、大丈夫よ! 私はこの通り健康児なんだから!」

あんたのせいで今は大丈夫じゃないけどね、と心の中で言い返す。

しかしそれだけでは安心できないのか、忠刻は予想外の言葉を発した。

「…少し、剣の稽古でもするか？」

「え、ええッ!？」

目を丸くした紗那を心配そうに覗きこむ。またしても心臓が音を立てた。

「いくら『力』を使えるとはいえ、そなたは無防備すぎる。だが、

剣でも使えたら少しは安心だろう」

そう言うと、障子を開けて三木之助を呼び、竹刀を二つ用意させた。

（え、ええ——っ!? 何、この状況——っ!?）

朝日と稽古（後書き）

忠刻と紗那の話は書いていて楽しいですね！

鈍感な忠刻と、何より興奮する紗那が好きです。

さて、その話はこれまでにして。

今日は、年に一度の悪夢の日でした。思いだしただけでも身の毛がよだちます。

そう、「貧血検査」があつたのです——！！

腕にゴム製のロープが巻かれ、血管に針を…あー！ダメです！もうこれ以上は言えません。今だに思いだしても痛さが蘇ってきますね…もう、二度とやりたくないです。

またしても色々とくだらないことばかり書いてしまいましたが、このへんで。

衝撃と後悔

鳥の声がやけに耳に響き渡った。足元は苔でぬかるんでおり、所々石が露出していた。

東御屋敷の中庭は風情を感じる。

灯籠の脇に聳える歴史を感じる松の木。

椿の花が群衆するのを見守るように立つ優しい桜は思わず目を奪われる。

また、石垣に囲まれた場所には井戸があり、昔ながらの穏やかな風景を引き立てているようだ。

残り数少ない桜の花が、縁側にある三木之介が用意してくれた緑茶に浮かぶ。

カラン、とししおとしが落ちる音が聞こえた。

そんな決して広いとはいえない、しかし風情溢れる中庭で向かい合う二人。

稽古用の袴に身を包んだ紗那は、大きく息を吸ってみた。だが、緊張はおさまりそうにもない。

対する忠刻は余裕の笑みを浮かべている。早くかかってこい——そんな声が聞こえそうだ。

二人の間の空気はピンと張り詰めており、今にも切れそうである。

竹刀をかまえる手には、はやくも手汗が滲んでいた。

凜とした忠刻の瞳に映る自分。唇をかみしめ、唾を飲み込む。

（…ちょっとまって。私、剣なんてできないわよ！ 体育の授業で一回だけ剣道を習ったぐらいでルールさえ分からないんだけど！）

様々な剣道についての用語が脳裏をかすめるが、どれもハッキリとした形をもたないまま消えていく。

（ここは体の柔軟性を使って勝負！）

剣のどこで柔軟性を使うのか全くもって疑問だが、紗那の決意はゆるがない。

忠刻と正面から視線がぶつかった。紗那は鮮やかに笑ってみせると、竹刀をかまえ直す。

ししおとしの音を合図に、忠刻に飛びかかった。とたんに空気が変わる。

険しい瞳で忠刻を捕えると、竹刀を突き出す。しかし、それはあっけなく阻止された。

二人の竹刀るががぶつかり合う。

力を込めるものの、相手の方が筋力は上だ。必死に守ろうとするが一旦飛び退く。

「その程度か」

微笑を浮かべる。明らかな挑発だ。

紗那はそれを察すると額の汗をぬぐい、姿勢を整える。

助走をつけ、大きく地を蹴ると中を舞う。下にいる忠刻に向かって振りかぶった。

伊達に体操部に所属しているわけではない。

激しいぶつかり合いの音が響いた。再び押し合うものの、長くは続かない。

紗那は柔軟性はあるが、剣は初心者だ。シロート当然忠刻にかなうはずがな

い。何度攻めても同じ結果になるばかりである。

紗那は必死に飛びかかるが、それを忠刻が軽々とうけてはじき返し、結局紗那が一步引くといった塩梅だ。

それに、汗だくの紗那に対し忠刻は呼吸一つ乱れていない。彼が強いという何よりの証拠である。

「やみくもに来るだけでは駄目だ。相手の動きを読め」

忠刻はそう指導するが、彼の太刀筋は完璧すぎて読めない。

肩で息をしていると、縁側に腰を下ろした者がいる。三木之助だ。

「私達も、見物させてもらいますぞ。のお奈阿姫」

「ハイ。紗那様の応援をいたします！」

いつの間に来たの：と思ったが、どうせ三木之助がさそったに違いない。

応援してくれるのは嬉しいのだが、逆に気が散る。自分勝手に指図するのも何なので、放置することにしたが。

竹刀をかまえ直すのは三回目だ。真っすぐな視線を忠刻に向ける。

彼もその意味を悟ったのか、笑顔を消し真剣な表情になった。

ゆっくりと、時計回りに移動する。忠刻との距離は一定に。

相手も、いつ攻めてくるか警戒しているようである。

じわじわと、体からこみ上げるものを感じた。瞳を閉じ、目を見開く――

全身から、青白い光を放つ。目の色は深い藍色だ。

忠刻は、異変に気付きこちらを凝視した。その頬には汗が蔭っている。

ただ、見物している奈阿姫達はそれに気付いていない。

紗那は荒い息を吐くと、忠刻に向き直った。

俊足で竹刀を振りかぶる。忠刻はとっさにかまえの姿勢をとったが間に合わない。

激しく両者が交わった。竹刀を叩きつける。

その強さに忠刻が驚く暇もなく、次の攻めが来た。それは確実に急所を狙ってくる。

さっきまでの彼女ではない——この強さは、何だ!?

髪を風がかすめた。数本が切断される。

竹刀で髪が切断されるなど、あり得ない。よほどの速さでなければ。

目の前に風が迫る。必死に受けるが、その威力は並ではない。

こちらを睨む紗那は、明らかにいつもと表情が異なる。あの優しい瞳はどこへ行った!?

奈阿姫達もただならぬ物を感じたのか、立ち上がって紗那を見つめた。

我に返ると彼女がいない。慌てて振りかえろうとするが、背中に衝撃が走る。

続いて後頭部が割れるような感覚が全身に響いた。

「く…っ!」

たまらず上半身を折った。三木之助に名前を呼ばれる。

だが、彼女の攻撃は終わらない。視界の端で振りかぶるのが見えた。

衝撃を覚悟していた。だが、それはやってこない。

不審に思うと、彼女は地面に崩れ落ちていた。頭を押さえながら見ると、気を失っている。

先ほどまでの青白い光は消えていた。いつもの彼女だ。
急いで奈阿姫が紗那を室に運ぶ。

「だ…大事ありませんか!？」

三木之助に顔を覗きこまれる。一つ頷くと、縁側に手をついた。呼吸を整える。

あの青白い光——あれは『神力』だった。

しかし、威力が強力すぎる。自分に怪我を負わせるなど。

間違いない。彼女は神力に浸食されつつある。このままでは——

彼女は、自分を失う。

紗那が歴代最強の神力を持っているということは知っていた。それなのに。

どうして、稽古などさせてしまったのだろう——

湧き上がってくるのは後悔のみだ。なぜ、自分は彼女を止められなかったのだろう。

「なぜ…!」

顔を押さえた忠刻の手の中から、竹刀が滑り落ちた。

衝撃と後悔（後書き）

何とか更新できました。もうヘトヘトのグニャグニャ(?)です。ゴールデンウィークも終わりですね。長かったようであっという間だったなあ：

さてさて、少し間があいたのには訳がありました。

そう、旅行です——！！

京都へと行っておりまして。なんせ歴史大好き人間なもので。

東御屋敷の中庭は、新撰組の屯所の中庭をモデルとしました。

「撮影禁止」の札をド無視して写真を撮っていました。（おい）
本当に綺麗な中庭でした。ただ文章でうまく表現できなくて：

紗那 「呑気に旅行なんかして：宿題終わってないくせに」

忠刻 「そうだぞ、休み明けに困るのがオチだ。恥を知れ」

奈阿姫 「しかも宿題の問題、八割以上間違えてましたわよ」

政朝 「バカって辛いんだね」 死なないと治らないんじゃない？」

三木之助 「これ、政朝様。 あれは死んでも治らないのですぞ」

なんか勝手に言ってますね。まあ無視しておきましょう。

あーゆう奴らは関わらないのが一番ですよ。

紗那 「全部本当なのが悔しいくせに」

うるさい！　頭いいからって威張るなバカ！

政朝　「日本語の使い方間違ってる？　これだからバ…」

勝手に出てきたくせにその先を言うんじゃない！

なぜがキャラにすっかり嫌われている浅葱です。

まずはキャラと仲良くする所から始めなければいけません。

そんな苦勞が絶えない今日この頃ですが、最後までお付き合いいただき恐縮です。

ではでは、これで。

眩きと温もり

「……………」

何故、私はこんな所にいる。

ここは彼女の室だ。すなわち西の丸の一番奥。ふと庭を見やると、桜が散っていた。どこか悲しげに不規則な舞いを披露し、静かに落ちていく。

——ああ、もう桜の季節は終わりなのか。

そんなことを思いながら、障子に手をかける。だが、忠刻の手は障子を引こうとはしない。

自然と開けるのを躊躇う。それは何故だか自身にも分からなかった。

忠刻はもう長いことこの廊下に立ったまま硬直している。

本来、ここは男性が立ち入ることを許されていない。忍び込んだのがばれる前に要件を済ませなければ。

——分かっている。分かっているのだ。この指さえ動けば——

しかし、なおも指は動かない。微かに痙攣し始めたのを見るとチツと舌打ちをする。

忠刻は障子から乱暴に手を離した。

自分は彼女に会うだけだ。ただ、心配だからで深い意味などない。そもそも、傷つけたのは自分だ。言わなくてどうする。

——まてよ。

——自分は、何を言うつもりだったんだ？

先ほどは悪かった。——いや、そんな薄っぺらい言葉では駄目だ。もっと彼女の心に響くような、そんな言葉を——

思考がまともに回らない。そもそも、女に対する扱いなど習っていない。

だが、千姫は違った。無愛想な自分に向かって笑ってくれた。心を開いてくれた。

あの笑顔は、この世で一番可愛いと思ったのだ。

彼女は、千姫にどこか重なるものがあった。

どこと聞かれれば分からない。しかし彼女の中にある何かは、千姫と驚くほど似ている。

「：まあ、容姿もだが」

不用意にも声に出してしまった。慌てて口を押さえると、障子に向き直る。

そもそも早く彼女に言わなければ。誰かに見られたら洒落にならない。

呼吸を整えてみた。だんだん脱線していた思考が元に戻ってくる。

自分は、彼女に怪我を負わせてしまったのだ。

外側からは決して見えない、心の中にある『神力』を威嚇させてしまった。

今でも後悔する。これでは彼女が神力に浸食される時間を早めてしまっただけだ。

第一、彼女はそうとう弱っているはずだ。この次元に来てから神力を使いすぎている。

いくら、最強とはいえあれでは体が持たないのも当然だ。

（…だが）

一体、誰がこの次元に彼女を連れ込んだのだろう。そして、何の為に。

神力を狙っているのは勿論だと思う。しかし、相手は確実にそれを使って『あること』をしようとしている。

それに、千姫が失踪したのと彼女が現れたのには何らかのつながりがあるはずだ。

（…あの夜）

何が起こったのだろうか。遠雷が鳴っていた、あの日――三木之助に調べさせているが、手掛かりは一向にない。

もたもたしていると、必ず次の手が来る。早く、千姫を見つけなければ。

いや、まで。ひょっとしたら、彼女は千姫を探し出せるのでは…そこまで考え、首を大きく横に振った。

（室に入らなければ何も始まらぬ！）

そして、今度こそ障子に両手を掛けた時――

「忠刻…？」

中で彼女が立ち上がる気配がした。

深い眠りからようやく解放された。視界がぼやける。

「……ん？」

目をこすりながらゆっくりと起き上った。今は、何時なのか。

そこまで思い、障子に人影が写っていることに気付く。大柄だが、少し優しい風貌。あれは――

「忠刻……？」

すると、影は驚いたように一歩後ずさった。するすると障子が引かれる。

「な……何故分かった」

忠刻は驚いた様子でこちらを見た。障子を閉めると、紗那の向かいに正座する。

「どうでもいいじゃない。それより、何の用で来たの？」

立ち上がるうとするが、眩暈が襲う。思わず膝をついた紗那に、忠刻は慌てて手を伸ばした。

忠刻に腕をつかまれる。ギョツとして振りはらってしまった。

「……ごごご御免なさい！ 何だか眩暈が……」

それを聞くと、忠刻は深いため息をついた。

「無理はしない方がいい。神力が不足しているのだからな」

（へ……？ 神力……？）

必死に言葉の意味を探り、記憶を辿る。それが戻った時紗那はあつ、と口を押さえた。

「私、稽古していて……ってそこまでしか記憶がない！ どうして布団

に!？」

「やはりな…」

忠刻が額を押さえる。その細い手には、うっすらと痣のあとが見えた。

「?どうしたの、その痣…」

「いや、何でもない」

さらりと流され不審に思った紗那だが、忠刻は話題を変えてしまった。

「おぬし、最近妙な事に巻き込まれたりしていないか…?」

「え?」

いきなり問われ、目を白黒させる。妙なことといったら政朝の事件だが、あれはもう完全なる別物だ。

(ま、まさか沼に落とされたこと知っているの…?)

この城に来て二日目の出来事だった。天守閣の真下にある庭園の沼に突き飛ばされたのだ。

紗那はその時、何となく誰にも言っではいけない気がして奈阿姫にさえも口を閉ざしていた。

「ひょっとして、忠刻様が突き飛ばしたとか!？」

「はあ?」

疑問形の語尾を聞き、体から血の気が引いた。

——自爆

そんな言葉が脳裏をかすめる。

「おい、突き飛ばしたとはどういう事だ」

（ああ〜やっちゃった〜）

紗那は忠刻に心の中で白旗を振る。

「…と、いう事があって…」

身振り手振りを交え、起こったことを丁寧に説明した。

忠刻は聞くにつれ、だんだんと顔が険しくなってくる。そして、『沼に落とされた』と言いかけた時、紗那の肩を掴む。

「おぬし——！何でそれを早く言わぬ！」

「だ、だってあの後すぐに神社に連れていかれて…」

「その時に話せばよかったものを——！」

「しよがないじゃない！『御信用にいいぞ』とか言って短刀渡したのは誰よ——！話す暇なかったんだもの！」

両者共にゼエゼエと荒い息を吐く。どこの少年マンガだよ、とつっこみたくなった紗那だが、忠刻があっさりと話をまとめてしまった。

「もう過ぎたことだ。忘れろ」

「流すな————！！」

少々荒い紗那のつつこみ（パンチ）をかわした忠刻はわざとらしい咳をした。

「冗談だ！」

紗那は布団の上に座りなおす。最初の緊張などどこ吹く風である。

「だが、それは問題だな…」

「な、何が！？忠刻様が流したこの方がよっぽどか問題よ」

「違う！おぬしが沼に落とされたことだ！」

訂正され思わず眉間にしわがよる。紗那は面倒くさそうに話を聞いた。

「突き落とした相手は、おぬしを殺そうとしたはずだ」
刹那、体内に寒気が走る。

殺す——何気ない一言だが、これほど恐ろしいものはない。

「わ…私を殺して何の得があるのよ…」

恐怖のため声が震えた。忠刻が紗那を指さす。

「おぬしの中にある、『神力』だ。相手はそれを奪おうとした。死ぬと、魂と一緒に神力は体外に放出されるからな」
ドクン——と心臓が一つ高鳴った。死ぬ——？

「今後、十分注意しろ。いざとなったら頼ってもかまわぬ——」

語尾が消えた。視線の先には激しく不安と動揺で震える紗那。

ギュッと拳を握りしめている彼女の背後に近づくと、そっと手を頭にのせる。

「—————！」

不意打ちだ。

忠刻の熱が体内に伝わる。紗那の顔が紅潮した。

体が動かない。胸が高鳴る。先ほどまでとは違う意味で震えそうだ。

思わず目をつぶると、自身の心臓の鼓動が体中に響いた。トクトクと規則正しい波打ちが序所に乱れていく。

「……悪い」

「!」

何故、謝るの…

その囁きを残し、忠刻の手が離れた。障子が閉まる気配がする。どうやら帰ったようだ。

(……)

だが、その温もりはまだ体にしみ込んでいる。

紗那は、ずるい…と呟くと、再び布団を頭からかぶったのだった。

眩きと温もり（後書き）

事件です。またしても事件です。くどいですが事件です。

お気に入りが一つ増えました――！

もう、とてもうれしいです。ここ最近三件止まりでしたので。

登録してくださった方、感謝！感謝！ですー！！

本当にありがとうございます。これで浅葱は元気百分百です。

（今なら何だってできるぜ！）

紗那 「じゃあ勉強したら？」

政朝 「一ヶ月後ぐらいにテストあるんでしょ？」

うっ：おまえら、あの時かぎりの登場かと思っていたのに：

ていうかなんで作者のスケジュールを把握している、チカン！

政朝 「忠告しているだけじゃん。また前みたいに『順位三十番内に滑り込むぞ』とか言っときながら結局叶わなかった、みたいなことになったりしないようにね」

ヌオオオオオ！それを言うな！！見てろよ、絶対今度こそ現実にしてやる：

紗那

&

政朝 「やれるもんならなってみれば？」

フン、受けてたとうではないか！

こうして浅葱と紗那たちのかけが始まりました。

どっちが勝つか、読者の方々も予想してくださいませ。

結果は一ヶ月後にお知らせします…

続く(?)

知らせと葛藤（前書き）

政朝 「駿府っていうのは今でいう静岡県のことなんだって」

紗那 「あの…何で冒頭からいきなりトリビアを？」

政朝 「まあまあ、後々大事になることは早く言った方がいいじゃない」

紗那 「???」

知らせと葛藤

「死んだ…だと…?」

今日になってまだ間もない明け方。薄紫色を帯びた空に一筋の光が浮かぶ。

日の出を見上げながらその人物はがっくりと膝をついた。天守閣の床が軋む。

自然と手が痙攣した。ゆっくりと後頭部を押さえる。

「バ…カナ…」

荒い呼吸を繰り返しながら床を見つめた。今だに信じられない。陽光が、顔を照らした。

視界が絶望という名の世界に染まっていく。あの者が死んだ。

——すべてが、水の泡だ。

「今まで…やったことは…一体…」

腹の底から怒りと憎しみが湧き上がる。それは頬を伝って着物に落ちた。

歯を食いしばり、拳を握りしめる。呼吸の乱れが激しさを増していく。

「おのれえええええ!!」

壁にかかっている数本の刀が視界の隅に入る。手を伸ばすと、一本を乱暴に握った。

容赦なく刀を抜く。銀色に輝く刃先が光に照らされた。

「あの男は…私が殺ると…誓ったのにも関わらず…!!!」

刀は空を切る。花瓶に丁寧に添えられていた百合の花が切断された。その衝撃で、前髪がかき上げられた。瞳は血走り、眉間には何本もの皺がよっている。

ふと、眩暈が体を襲った。上半身を折る。刀は軽い音を立てて床に落ちた。

呼吸を整えると、顔を上げる。

「いや…まだ、可能性はある…神力さえ…神力さえ…手に入れば…!!!」

刃先に映ったその瞳は、濁った紅色を帯びていた。

・・・☆・・・

青い澄み渡った空に向かって聳える姫路城。その中の一廓で朝餉を取り終えた忠刻は席を立った。

障子を開けると眩しいばかりの朝日が顔を照らす。

渡り廊下を悠然とした足取りで歩くと室に入った。仕事のためである。

硯をすりさらさらと筆を紙に滑らせていると、廊下から「忠刻様」という聞きなれた声が飛んできた。

「入れ、三木之助」

筆を滑らせたまま静かに言った。すぐさま「は」と、返事が返され障子が開く。

三木之助は向かいに腰を下ろすと脇に積み重ねてある書類の束に目を通す。

いつも通りの光景だ。

ふと、三木之助が手を止める。多少気になったが仕事を続ける。

「良い天気でございますね」

そんなことかよ、と思いながらも声には出さずにいた。一腹のため湯気が上がる茶に口をつける。

「そういえば、紗那様が来てからは天気が崩れませんな」

瞬間、忠刻は吹き出した。茶はもろに書類にかかり台無しだ。ゴホゴホとせき込む主を見て三木之助は目を丸くする。

「ど、どうなさいましたか!？」

あわてて懷からてぬぐいを取りだす。忠刻はそれを無言で受け取ると口元を拭った。

「なんでもない」

「いやいや、たった今吹き出しましたよ!？なんでもありませんで
すぞ!」

三木之助の細かいつつこみに言葉を詰まらせる。何事か考えたすえ口を開いた。

「茶に塩が入っている」

「いやいやいやいやいや、わたくし私も飲みましたけれど一切塩など混入し

「ていません！」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙の中、鶯うぐいすの聲がやけに聞こえたのが印象的だったという。

「記憶から消去しろ」

「…努力いたします」

少し頬を紅潮させながらも忠刻は再び筆に手を伸ばす。しかし、その手は廊下から近づいてくる足音により動きを止めた。

「忠刻様！！」

いきなり家臣の一人が障子を開け放つ。息が上がっており、肩が小刻みに揺れていた。走ってきたに違いない。

「おぬし…」

三木之助が無礼を指摘する前に家臣の大喝が飛んだ。

「駿府城にて家康候息絶えたとの御報告につかまっています！」

「なに！？」

二人同時に返事をしたことにも気がつかない様子で立ち上がる。

忠刻は落ち着いて家臣に聞いた。

「病死か？」

「い…いえ…何でも鯛の天ぷらを食べられてそれで…」

「はあ！？」

まったくの意味不明である。鯛の天ぷら？ 訳が分からないので、忠刻はあえてそこは無視した。

「だが、それは由々しき事態だな…」

忠刻がそう言ったのには理由がある。彼の母は徳川家康の嫡男・松平信康と織田信長の長女・徳姫との間の次女・熊姫だからだ。かなりややこしい関係だが、まとめると

『忠刻は家康の遠い親類』
ということになる。

こうなれば嫌でも葬儀に参加しなければならない。そむけば幕府に反抗する行為と見られ、即刻お家取りつぶしとなるからだ。つまり葬儀は葬儀でも今後の姫路藩の行く末がかかっていると云っても過言ではない。

「して、葬儀はいつに？」

忠刻の気持ちを代弁して三木之助は家臣に問う。

「お…遅くても来月には…」

来月となれば今からでも準備しなければ間に合わない。家康が亡くなったのは駿府。なら、葬儀もその周辺で行うはずだ。

姫路から駿府までは馬でも三十日はかかる。最低でもあと三日後には出発しなければ。

——だが。

彼女は、どうする——？

只でさえ危険な状況だ。置いていくなどできない。ましてや昨日は怪我まで負わせてしまったからなおさらだ。

「忠刻様？」

きっと今の自分は険しい顔をしているのだろう。三木之助の心配声が耳に入る。

彼女はほおっておけない。しかし行かねば姫路の危機だ。

これほどの葛藤に悩んだことが今までにあるだろうか。

――まで。選択肢が一つだけある。

彼女を、三日以内に元の世界に返せばいい。

ゆっくりと顔を上げた。そのためには早く彼女を連れてきた下手人はんにんを見つければ。

きっと相手も三日以内に大きな行動に出るはずだ。家康が死んだとなれば――

そうと決まればこんな所で休んでいる場合ではない。

「行くぞ、三木之助！」

「忠刻様！？！」

突然廊下に足を踏み出した忠刻の後を慌てて追う。

――波乱の三日が、幕を開けた。

知らせと葛藤（後書き）

すみません。いきなりですがすみません。

更新がすごく遅れました。いやゝ最近色々あるもので…
という世間話は置いておきますね。

さて、珍しくも(?)体調を崩しました。

本当は今日は予定があったのですが休みました。ハイ。

五月なのに風邪です。喉がとても痛いです。しかも花粉症×風邪で最悪です。

奈阿姫 「いつも馬鹿みたいに元気ですのに…一体どうしたんですの？」

しょうがないだろ！本当に色々あったんだからな！

と、いうわけで浅葱の悪夢の二日間を振りかえってみましょう。

おとつい・貧血検査に続く嫌な学校行事、運動会があった。転倒して膝から血が出た。

昨日・なぜかハイキングで山に登った。計九キロの道のりを全力ダッシュした。

政朝 「くだらなくしかも最後のナニ？山登りって…」

だまれ、口をはさむな！そのおかげでこうして更新できたんだからな！

しかも来月にはテストもある…なんて最悪なマイライフ！

と、いうわけで風邪のせいで頭が混乱しております。文中にもいく

つか変な個所があるかもしれませんが風邪のせいだと思ってください。
はい。
では

神社と鍵

「御馳走さまでした」

朝餉を取り終えた紗那はしっかりと両手を合わせた。すぐさま奈阿姫が皿などを下げに来る。

今日も天気は晴れた。ここの所晴天が続いている。雨が降らないのは有難いといえば有難いのだが、農民達は困るであろう。そう思うと何故だか気分が晴れない。

城^こに来て早くも四日目。だが、あれだけ沢山の出来事がいっぺんに起こると、もう一カ月も時が経った錯覚を覚える。

そして今だに元の世界に帰れない。

無理なことだというのも分かっている。しかし紗那は城での生活を積むとともに、永遠に帰れないのではという不安が自身を襲うのだ。こちらに来て四日。ということはあちらでも四日経っているのだろうか？

もしそうだとしたら、母はどうしているのだろう。きっと警察に捜索願いを出しているに違いない。

『紅梅紗那（15）姫路城で行方不明』という新聞記事まで脳裏に浮かんでくる。

必死にマイナス思考の妄想をかき消そうとしたが、それは奈阿姫の声により自然と破られた。

「紗那樣、どうかなさいました？ 心配事があるのならおっしゃってください。私は紗那様の味方ですから！」

「ありがとう、奈阿姫」

声を弾ませようとしたが、失敗した。奈阿姫はすぐにそれを見抜いた様子で話しかける。

「本当に大事ありませんか？ いいですよ、頼ってもらって」

馬鹿。そんなこと言われたら逆に心の線が緩んでしまう。今まで、何とか保ってきたのに。

それに、奈阿姫は紗那が未来から来た事も神力を持っていることも知らないのだ。

せいぜい、『千姫とよく似ているという理由で城に間違われて連れてこられた娘』ぐらい程度の認識であろう。

つまりこの世界で紗那の正体を知る者は、忠刻、三木之助、政朝の計三人に限られる。

(そして……)

問題の残る一人は紗那をタイムスリップさせた人物である。これで計四人だ。

しかし、信じたくない話だが最初に上げた三人の中に犯人がいる可能性もある。紗那はそれが最も恐ろしいと思っているのだ。

(でも…まさか…ね)

三人の中に犯人が潜んでいるのなら、最初に会った時とつくに殺されているはずだ。そう思い込み、悪い妄想を頭から再び消去する。

「大丈夫よ。心配してくれて有難う、奈阿姫」

いつもと変わらぬ笑みを浮かべる。なんとか涙を流さずにすんだ。奈阿姫はそんな紗那を見て安心したのか顔に笑顔が広がる。

「では、本日は何をいたしますか？ あっ、良い和菓子が入ったのでお茶にでもしますか！」

そうだ。焦ってもことは訪れない。

「奈阿姫に任せるわ」

「ハイ！」

嬉しそうに調理室に向かう廊下に足を踏み出す奈阿姫だが、もう一方からも足音が響いてくる。

ハッと気付き、思わず叫んでいた。

「奈阿姫、危ないっ！」

「え？」

刹那、奈阿姫は駆けてきた人物と正面衝突をし床に倒れた。ドガン、と世にも悲しい音が辺りに響く。

「わ、悪い奈阿姫っ！！」

忠刻は慌てて前方に倒れて目を回している奈阿姫を起こした。紗那はその様子を見て即座に指摘した。

「忠刻様、いきなり駆けてこないで！ 人に危害を与えることになるんだから」

「ち：違うつ：お前：あと三日：返す：」

慌てぶりは相当なものだ。まともに呂律が回っていない。

忠刻はしばらく立ちつくして呼吸を整えたのち、紗那の手をつかむと猛スピードで廊下を走り、人気のない部屋に連れ込んだ。

「へ：ちよっ：一体何！？ ていうか奈阿姫気絶してたのに置いてきちゃったよ！？」

「まあ落ち着け」

「いや、あれあんたのせいでしょ！」

そんな紗那とは対照的に本当に落ち着いた様子の忠刻は、部屋の障子を閉めると向かいに腰を下ろした。急にあらたまった態度に変化した忠刻を見て、何事かと思わず口を慎む。

「いいか、これから話すことをよく聞け」

「は、はい」

忠刻の真剣な瞳を見つめていると思わず喉が上下する。

「これから、おぬしを三日以内に元の世界に返そうと思う」

目をいっぱい開く。先に結論を述べた忠刻は細々とした理由を話はじめた。

「本日、家康侯が駿府城にて亡くなった」

「ええええっ！？ あのだ川家康が！？」

紗那はすばやく脳裏に歴史年表を思い浮かべる。たしか家康が死んだのは元和三年の四月。ぴったり今の時期だ。

「そして、私はその葬儀に行かねばならぬ。遅くともあと三日後にな。そうすると自然におぬしはそれにあわせて帰らなければ命が危うい」

「な、何で…？」

「考えてもみろ。私が行くとなるとここの家臣も八割は駿府に行かねばならん」

そこまで聞いて、紗那はあっと声を漏らした。

家臣がいなくなるということは姫路城は無防備な状況になる。そこに貴重な『神力』を持った自分がいれば。

当然、100%の確率で襲われるだろう。運が悪ければ殺されるかもしれない。

「そういうことだ」

紗那の意図を察した忠刻は静かに言う。しかし紗那は体を震わせたままだ。

「で、でもどうやって元の世界に…」

その言葉を待っていたというように顔を上げる。

「神社だ」

「え」

神社というと自身の先祖が建てた姫路城内にある、あの：

「あそこには神力に関しての書物が沢山あったはずだ。ひよっとすると元の世界に戻る鍵があるやもしれん」

モトノ世界ニ戻レル鍵――

その言葉だけが頭に幾度も響く。一瞬意識が飛んだが忠刻の声により現実に戻される。

「と、いうわけでだ、行くぞ」

「えっ！？ 神社に！？」

「当たり前だ。ほかにどこに行くという」

立ち上がった忠刻は廊下に控えさせていた三木之助を呼ぶ。

「例の場所から鍵を」

「ハッ」

二人のやり取りを聞いていた紗那は部屋を出て行こうとする忠刻を呼びとめた。

「忠刻様、『鍵』って？」

「ああ、神社の境内に入るには私の部屋にある鍵がいるのだ。書物を荒らされたら困るからな」

「へ」

そして会話をしている間に三木之助が遠くから駆けてくる。

「速っ！ ここから東御屋敷まで結構な距離あるのに…」

「まあ、あやつは筋肉の発達が著しいからな…」

二人して呑気につっこみを入れていると三木之助が目の前まで来て急停止する。

かなり息は上がっており、顔には滝のような汗が流れている。

「どうした三木之助、そんなに急がなくてもよいものを」

三木之助は二人にキッと向き直ると声を荒げた。

「じ：事件でございます！」

ぱっと言われても実感が湧かない。一体何があったのだろうか。

「鍵が：鍵がありません！ 盗まりました！！」

神社と鍵（後書き）

お久しぶりです、浅葱です。風邪が治りました。復活です！

心配をおかけしましたがもう平気です！さあ、これからガンガン更新を――

政朝 「テストは？」

紗那 「来週に迫ってるんじゃないの？」

………………。ぐおおおおお！忘れていたあ！！

忠刻 「やれやれ、いきなり発狂とはな。馬鹿度が増したぞ」

静まれ天然ボケ！ それにしてもすっかり忘れていました、テスト…

政朝 「あの話覚えてるよね？」

フン、三十番内に入ると言う話だろう。忘れるものか！

それによって今後の作者とキャラの上下関係が決まるんだからな。

政朝 「じゃあ入れなかったら土下座してね」

いいとも、その変わり入れたら今回の後書きで作者に逆らった奴↑
（政朝・忠刻）

次の話でぞんぶんにいじってやる！

忠刻 「入れたら、の話だろう」

こうしてますます熱くなっていく『中間テスト賭け対決』でありました。

お気に入りが一件増えたのをはげみに勉強を頑張ります。

登録してくださっている方、新たに登録してくださった方、本当にありがとうございます。

では、次回はテストが開けた六月初めにお会いしましょう。

繋がりと花瓶

しばしの間、沈黙が続いた。

三木之助の大喝の余韻と肩で息を吐く呼吸音が微かに辺りに響いている。音は、それぐらいだ。

魂と意識が一瞬飛んだ紗那は慌てて首を横に振った。すぐさま深く深呼吸をする。

落ち着いた所で隣の忠刻を見ると、下を向いて震えていた。髪で隠れているため、表情は分からないが。

「なにいいいいい!?!」

突然、忠刻が顔を上げた。かと思うと凄まじい速さで三木之助の襟をつかむ。

「本当か、それは」

「ヒィィィ!?!う、嘘を申すはずがごめいせん!」

三木之助の震えた返答を聞くと静かに手を放す。らんらんと輝いていた目の殺気は消えていた。

どうなることやらと二人のやり取りを見守っていた紗那は安堵の息を漏らす。

だが、安心してはいられない。『鍵が盗まれた! 紗那の身が危ない』という等式が成り立つからだ。

忠刻は紗那の数倍青ざめた顔だ。額を抑えながら呟く。

「馬鹿な…一体、どうやって…」

あまりにも顔色が悪いので、紗那は心配の気持ちも含めて話しかけてみた。

「その、鍵はどこにあったの?」

「東御屋敷の忠刻様の寝室でございます。あそこに入れる者はそうそういません」

忠刻の代わりに三木之助が答えた。その返事を聞くと、今度は紗那が青ざめる番だった。

やはり、下手人はこの城内にいるのだろうか。いつも、平然と言葉を交わしている人が、実は――：

そう思い込むと限がない。だが、その可能性も捨てきれないのが恐ろしいのだ。

いつも、誰かに見られている気がして――

重心を崩してよろけた紗那を忠刻はとっさに支えた。すぐさま顔を覗き込まれる。

「…紗那？」

瞳の中に映る自分に気が付き、ハッと体を起こす。慌てて笑顔で誤魔化した。

「何でもないの、それより一回神社に行かない？」

その慌てぶりを即座に見抜いた忠刻だったが、あえて気になげず返事を返す。

「なぜ神社に？どのような根拠があるのだ」

「ホラ、あそこに神力についての資料が沢山あるっていったでしょ？盗まれていないかとか…」

それを聞いた忠刻は納得したように軽く頷いた。

「それは確かに心配だ。三木之助、行くぞ」

早々と歩き始めた忠刻を急いで追う。紗那もその背中に続いた。

（どうか、盗まれていませんように…）

密に両手をあわせた紗那を、忠刻は横目で見つめたのだった。

風が強まってきた午前。辺りの草木はザワザワと警戒するように葉を鳴らし始めた。

両方の道は竹林で囲まれ、植込みには秀麗な椿の花が彩られている。もう花はだいぶ散ってしまっているが。

（忠刻様と二人で訪れた時にはまだ咲いていたのに…）

椿を見ながら記憶を掘り返す。たしかあれば、城に来て二日目、いや三日目の出来事だっただろうか。

すべての記憶が今となっては幻のように浮遊している。もう、あの日々には二度と戻れない。

もうすぐ、時が来る。この世界とも永久におさらば（のはず）だ。

（…って何早まってんの私！まだ鍵が見つかってもないのに！第一、資料が盗まれていたら…）

そこまで思い、思考が途切れる。

——盗まれていたら？

資料がなければ元の世界に戻る方法が分からない。と、いうことはこの世界でお世話になることになる。漫画も、テレビも、携帯もないこの世界で…

——それだけは避けたい。

そこまで考え、思考が閉ざされた。先頭の忠刻が停止したからだ。ふと見ると、頭上には色あせた赤色の鳥居が青空を背景に聳え立っている。到着だ。

すぐさま鳥居をくぐり、両手をあわせ目を閉じた忠刻は本堂の障子を開ける。

ばっ、と辺りに細かいほこりや砂が舞った。思わず口元を覆う。

「忠刻様、どう？資料、ある！？」

彼が死角になっているため、中の確認が出来ない。中を覗き込んだ忠刻は肩をストンと落した。

「大事無い、資料はある」

振り返った忠刻の優雅な白い手にはその一つと思われる物が握られていた。

無駄な力が入っていた紗那は脱力する。とりあえずは一安心だ。

忠刻の了承を得て、中に入らせてもらうことになった。草履を足から外すと境内に踏み入る。

中はかなりほこりっぽい。時々目の前を蚊や鼠などの小動物が通り過ぎる。つんとかびた臭いもしたが、どこか優しい、自然な雰囲気漂わせていた。

そして、片隅には茶色く変色した和紙の束が乱雑に積み重ねられていた。きっとあれが『資料』だろう。中身が気になったが、引き抜く勇気がなかったので放置した。

その資料の前方には、高価そうな西洋風の花瓶がいくつか並べられていた。蒼い花模様が鮮明に施されており、とても手の込んだ作りだ。

一通り中の確認が終わったので、備品が足りないか数えている忠刻の元に戻る。

眉間に皺を寄せていた忠刻は振り返ると腕を組んだ。

「それにしても…一体誰が鍵を…」

考え込む忠刻だが、紗那は先ほどから気になっていたことがあった。この境内の備品、どこかで見たことがあるような気がして…

二人は同じポーズで記憶整理に取り掛かった。その様子を見た三木之助は国宝並みの貴重な場面だと思い込み、画家を読んで絵を描かせようとしたがさすがに忠刻が止めた。

紗那は、もう一度ぐるりと中を確認する。ある一点に差し掛かった

時、あっと声が漏れた。

急いで忠刻の元に戻ると、言葉を紡ぐ。

「忠刻様、ひょっとしたら政朝が鍵を持っているのかも…」

「……………は？」

予想もしていなかった意外な親類の名前を聞き、思わず真の抜けた声を発する。

「…それは、どういう理由だ？」

待ってましたというように紗那は境内の一角を指差した。

「この花瓶、政朝が持っているのと同じ種類だったわ」

そうなのだ。以前、無理やり政朝とともに『楽しい楽しい邪悪な池祓い』（皮肉たっぷり）に出かけた際、政朝はこの神社に置いてあるのと同じ柄の花瓶を使用していた。

「……たしかに、この花瓶には邪悪な物を封印するという話があるが」

「きつと、その時にここから持ち出したのよ！」

「くそ、あいつめ。神社には無断で立ち入るなどあればと言ったのに…」

ほおっておくと政朝の短所を語りだしそうな勢いなので紗那は話をまとめる。

「とにかく、鍵は政朝が持ってるってことで取りにいきましょう」

「ああ。あいつならゴミと間違えて捨てそうだからな、早めに取り返さねば」

こうして、政朝の屋敷に向かうことになった紗那達はここで選択を一つ誤った。

まさか、あのような事態に巻き込まれるなどともしらず。

――その日、風速10m以上もの強風が姫路を襲うこととなる。

繋がりとは花瓶（後書き）

やっとテストが終わってひと段落着いた浅葱です。お久しぶりです。まず、嬉しいことを先に報告すると、お気に入りが一件増えました。感激です。登録してくださっている皆様、毎度ながら心からの感謝を。ありがとうございます。

さて、ここからはブルーな話になります。テンションが下がりたい読者の方は読むのを避けてください。

テストが終わりました。死にました。はっきりいって玉砕です。ハイ。

いや、サボっていた訳じゃあないんですよ！？でも、実力の差というものがあって…

忠刻 「絵を描いていて遊んでいた奴が何をほざいているのだ」

紗那 「しかも誘惑に負けてわらびもちの車に全力ダッシュしていたのは誰よ」

うううっ…イキナリきつい言葉が飛び出しました。この二人、Sです。怖いです。

政朝 「ギターも弾いてたよね。下手の横好きってヤツ？」

間違えました。三人です。おおよよ…最後のは大ダメージです。（涙）

奈阿姫 「つまり、勉強していなかったんですね☆」

ああっそんな奈阿姫まで…綺麗にまとめないで…出番がなかったか

らっていじめなくてもいいんじゃない？

政朝 「ま、何にしても今回の懸けは僕の勝ちだね」

ううゝ…そうだった。忘れていた。結果は来週あたりに分かる予定です。

どうか、浅葱に勝利の女神が降臨するよう、祈ってください！（切実ですっ！！）

殺意と絶叫

静寂の空間に、突如馬の高らかな鳴き声が響き渡る。

忠刻が馬を最大限急がせるために手綱を打ったためだ。城の鉄壁の守りとも言われるいかめしい門が鈍い音を立てて開く。

家臣が頭^{こうべ}を垂れ、「いつてらっしゃいませ」と声を懸けた時にはもうそこに忠刻の姿はない。

一陣の風が吹き終わったところ、家臣は立ち上がると門を閉めにかかる。だが、ふとその歩を止めた。

顔を少しばかり上向かせると、その目に上空の蒼色が映る。別に変わったところはない。いつも通りの晴天だ。だが、何故だか胸騒ぎがする。

——今日は雲の流れが異様に速い。

しばらく空を見つめていた家臣だったが、門を閉めるのを忘れていたことを思い出す。

「忠刻様…どうかご無事で…」

重みと歴史を感じる姫路城の門を閉めながら、家臣はただひたすらに祈った。

「おい、大事ないか」

忠刻が投げかけた視線の先は、馬の後方でぐったりと上半身を垂れている紗那がいる。

こうして馬に相乗りするのは二回目である。だが、この感覚にはどうにも慣れない。

当初、政朝の屋敷に向かうため忠刻と馬に相乗りをすると聞いた紗那は、胸が高鳴っていた。

（馬に相乗りって：何だか恋人同士みたいじゃない！？ということ
は忠刻様の腰に手を回すことに：）
下手な妄想を掻き消し、不安と喜びが混ざっていた紗那だったが、いざ乗るとなると激しい揺れと流れる景色のため、酔いっぱなしである。全くと言っていいほどロマンチックの欠片もない。

（誰よ：『馬に相乗りⅡ恋人同士』なんていう方程式を作成した奴は！！私に今すぐ謝りなさいよ！）

それはお前だろと思うが、現在の紗那は混乱中なので指摘したところで無駄だろう。

だが、紗那が酔うのも無理はない。なぜなら、只今の馬の速度は車を超えているからだ。

しかも、紗那は馬などとは程遠い生活をしていたのでなおさら慣れない。

もつと北海道行った時に乗馬体験をしておけばよかったなどという後悔が湧き上がってくる。

そして、理由はもう一つあるのだ。

政朝の屋敷まで行くには二つのルートがある。平坦な馬向きの道と断崖絶壁の近道である。

何を思ったのか、忠刻はあえて後者の道を選んだ。そのため、紗那は震度七にともなう激しい揺れを体験する羽目となった。

「おい、本当に大事なかい？ 顔が白いぞ」

お前のせいだよ、お前の。と叫びかけたが慌てて言葉を飲み込む。せつかく心配してくれているのに。

両頬をぽちんと叩くと顔を上げ、わざとらしい作り笑いを浮かべた。

「だ、大丈夫よ…全然元気っ！」

「そうか、ならよい」

どこがよいのか全く不明だが、忠刻は変に納得した様子で再び馬を急がせる。

「もうしばらくで到着だ」

忠刻のその言葉にほっと胸をなで下ろす。この地獄もあとほんのちよつとの辛抱だ。

一体何時間こうして馬に振り回されていたのだろうか。感覚さえ狂ってきている。

と、急に視界が開けた。眩しいばかりに差し込んでくる陽光に思わず目を覆う。

だいぶ眩しさに慣れた所でそっと手を外すと、視界一杯に広がっているのは広大な規模の屋敷だった。

東御屋敷ほどもでの大きさではないがかなりの敷地を所有している。それは彼が権力者だということを示していた。

忠刻に手を貸してもらい馬を下りる。何時間ぶりかの大地に立ち、自然と背伸びをした。

馬を近くの木に結び終わった忠刻は振り向くと屋敷の門に向かって歩を進める。

それに気づいた様子の門番は慌てて忠刻に跪くと門に手を掛けた。

「おい」

その動作を離れた所で見つめていた紗那は突然声をかけられ正気に

戻る。

「お前も来い」

「え、ええっ…でも…」

「何のためにここまで来たと思っているのだ、これはお前の問題でもあるのだぞ」

厳しい声音できっぱりと言った忠刻に言い返す言葉がない。ためらった後、しぶしぶ後に続く。

頭を下げる家臣の横を通り過ぎ、足を踏み入れると目の前に映ったのは優雅な庭園だった。

所々露出した岩に隙間なく生える青々とした苔。そしてそこから伸びるのは可憐な紅桜。

「……すごい」

意識した訳ではないが声が漏れた。だが、忠刻は見慣れているのか気にも止めず速足で廊下を進む。

「早く来い」

「は、はいっ」

今日の忠刻は何故だか機嫌が芳しくない。それもこの屋敷を訪れてからだ。不思議に思っていた紗那だが、理由はすぐに分かった。

「あれ、兄上久しぶりだね。三日ぶり…だっけ？」

来たはずの道を振り返ると、平然と腕を組んだ政朝が立っていた。その表情には全く驚いた様子がない。まるで自分達が来るのを分かっていたも同然のふるまいだ。

「お前にいつ会おうが、そんなことは関係ないだろう早く室に通せ」「相変わらずせっかちななあ、怒りすぎはお肌に悪いよ」

「早く室に通せと言ったのが聞こえなかったか」
鈍い音を立てて刀が抜かれる。それが政朝に振りかかるすんでの所で紗那は二人の間に割って入った。

「とにかく！政朝に話したいことがあるの！！」

睨まれた政朝は逆に笑顔を浮かべると、まるで花でも眺めるかのよう
に紗那を見つめた。

「久しぶり、紗那ちゃん。全然変わっていないみたいだね」

「ええ。でも、血の気の多さなら誰かさんのおかげで増えましたけど
ね！」

フツ、と艶麗な微笑を浮かべると、彼は軽く紗那の頬に触れた。

「さっき言ったでしょ？ 怒りすぎはお肌に悪いって。君って本当に
可愛いよね」

「な——！？」

突如、紗那の後方から風が駆けた。政朝はその殺意たっぷりの拳を
少し身をずらしただけで避ける。

「——調子に乗るのもいい加減にしろ。次同じ行動をすれば斬る」

「はいはい。すみませんでした、御免なさい」

ひらひらと手を振る政朝を冷徹な眼差しで睨む忠刻——この兄弟は、
とてつもなく仲が悪かったのだ。

今にも殺し合いになりかねないので、紗那は本題に入ることにした。
一つ咳をすると向き直る。

「政朝、神社の鍵と花瓶を返しなさい」

「は？」

「だから、鍵と花瓶を返せて言ってんの！」

政朝は、しばらく目線を向上かせて考えたのち、ポンと手を打った。

「ああ、あれね。借りっぱなしにしてた」

そう言う又何やら懐を探り始める。今度こそ『ド●エモンのポケッ
トか』と盛大につっこんでやりたくなった紗那だが、通じないので
やめた。

しばし探し出すまで時間を要するようなので忠刻は次の話題を切り
出す。

「駿府で家康候がお亡くなりになったのは知っているな」

「あー…うん。葬儀に行かなきゃならないんだよね、面倒くさー」
懷をいじりながら政朝は溜息をつく。

「別に今逝かなくてもいいのにさ。せめて紗那ちゃん元の世界に帰してからにしてほしかったな」

「あと三日だ」

「……………は？」

懷を探る手が停止した。

「あと三日、つまり家康候の葬儀に出発するまでに紗那を元の世界に帰す」

「ちよつとまっ…それってかなりムチャ…」

突如、政朝の言葉の語尾が不自然に切れる。彼は何かを感じたのか、いきなり廊下を駆け出す。

「お、おい」

何事かと忠刻、そして紗那も後を追う。ふいに、重いものをこすり合わせる音が響いた。そしてぶつかる金属音――

『ぐわあああああっ！！』

「！！」

絶叫が、辺りに響き渡った。急いで駆け付けると、政朝がかがんで誰かを起こしている。この屋敷の家臣らしき人物だ。

彼の腕から肘にかけて滴るのは紅色を帯びたどろりとした液体。その負傷者の顔を見て、紗那は思わず息を飲んだ。

斬られていたのは、先ほど門を開けてくれた門番だった――

殺意と絶叫（後書き）

政朝 「はい。皆様、読んでくれてありがとうございます」

忠刻 「……ちよつとまで、何故我々が後書きを乗っ取っているのだ、浅葱^{あいづ}はどうした、浅葱^{あいづ}は」

……ここだよ………

両者 （暗っ！！浅葱暗っ！！！！）

政朝 「…ど、どうしたのさ、やっとテストが終わったんでしょ？」

ズーン……（空気が沈む音）

政朝 「え、えーと、僕何か言ったっけ？」

忠刻 「ははん、さてはテストの順位が悪かったな」

そうなのです。ハイ。忠刻様の言う通りでゴザイマス。浅葱、一生の不覚です。土下座しざるをえなくなりました。

いや、結構頑張ったんですよ！？でも、今回平均点が意外と良くて…

政朝 「読者に愚痴ってどうすんの」

忠刻 「言い訳にしか聞こえぬぞ」

じゃあとりあえず…

御免なさい（土下座）

両者（……………）

両者（つていうかパソコン内だから土下座しても分かんね——！意味ねえ——！）

しかも今はテスト週間中なのです。最悪です。うう…

今度こそやらねば、本当に浅葱は死んでしまいます。お手数ですが、応援よろしくお願いいたします。あと、更新が遅れたことを、心からお詫び申し上げます。

それでは、今度は期末テストが開けた七月にお会いしましょう。（神よ！私に奇跡をっ！！）

紅桜と鮮血

思わず足がすくんだ。体全身が氷ついたように動けない衝撃に襲われる。

止まることを知らないその液体は、紗那の目の前で懇々と溢れ出ている。反射的に口元を覆った。

ドラマや時代劇で血を見たことはある。だが、これは現実だ。何かが格段に違う。

「……紗那！」

突然音が戻った。忠刻が険しい表情でこちらを睨んでいる。

「何をしている、早く逃げろ！！」

「え…な、何で…」

「まだ分からぬか！こいつを襲った奴は完全にお前を狙っている！！」

次々と厳しい声が飛ぶ。紗那はどうしていいか分からず、その場を見渡した。

辺りに自分達意外は人の気配がない。きっとこの場所は屋敷の中心と離れているため、家臣の数も多くはないのだろう。

こんな状況の中、自分だけ逃げだす訳にはいかない――

「嫌です！忠刻様達を置いていくなんてできません！！」

今にも破れそうな勢いで忠刻の着物の裾をつかむ。一瞬ひるんだ彼の後ろで、政朝が微笑を浮かべた。

「あれ？君って案外頑固者だったりするのかな。まあ行くか行かないかは自由だけどね」

「おいっ、政朝、お前――」

「いいんじゃない？これはこの子の問題なんですよ。それに――」

政朝はちらりと自分を真剣な瞳で見つめる紗那を眺めた。

「紗那ちゃんは逃げる気はないみたいだし」

忠刻が言葉を詰まらせる。そして、勝手にしろと呟くと刀の鏢に手を掛けた。

だが、その動作は負傷したはずの家臣から漏れる呻き声によって停止する。慌ててしゃがみこむと無理に体を起こそうとしている家臣を寝かせた。

「おい、大事ないか」

「は、はい…」

腕を組んだ政朝はすぐさま家臣に質問する。

「ここで何があったの？」

家臣は一瞬体を震わせたが、主の命令は絶対だ。すぐに口を開いた。「じ、実は、黒い靄のような物が襲って来て…気が付いたらこの状況でした…」

その言葉に真っ先に反応した紗那は家臣に詰め寄る。

「それって、紅い靄が中心になかった!？」

「は、はい。黒い靄の真ん中に…わずかですが」

やはりそうだ。以前、政朝と池祓いに行った時に紗那を殺そうとした者と同じだ。

と、いうことは侵入者の狙いはやはり自分ということになる。

「上等じゃない…」

思わず口元を緩めた。政朝が茶化した口ぶりで問いかけてくる。

「あれ? 紗那ちゃん、まさか…」

「そのまさかよ! 迎え撃ってやろうじゃない、侵入者をね!!」

幸い短刀は懷に身に着けている。この刀に、神力を注ぎ込めば相手を撃退することは可能はずだ。

「おい、その二人」

突如声を低くした忠刻に驚いて振り返る。彼は陰しく鋭い目をこちらに向けた。正面から視線がぶつかる。

「これは遊びではない、下手をすれば命に係わる。無駄な行動は一切するでない」

「…は、はい…」

普段の天然体質な忠刻とはまるで別人だ。さすが姫路の藩主に匹敵するだけある。

紗那は言われた通り、気を引き締めながら辺りを再度見渡した。古びた床、屋根を支える柱、秀麗な紅桜が彩る中庭、とゆっくりと視線を移していく。

張りつめた空気の中、かすかに、ずるりという気味の悪い音が響く。真っ先に反応した元体操部の紗那は刀を構えた姿勢のまま振り返った。

無数の黒い霞がこちらに向かってくる。その後方に自陣を構えるのは墨のようなドス黒い靄だ。

「————ッ!!」

とっさの登場に動揺しながらも短刀に二本の指をあて、神力を注ぎ込む。

体が熱い。見えない力が放出されていくかのように。

少し離れた所で同じく刀を構えていた政朝は、紗那の体を包み込む淡い金色の光を見て微笑を浮かべた。

「人の家をあまり汚さないでくれるかな、どこか誰かは知らないけれど!」

紗那に続くような形で靄に向かって突進していく。その脇で忠刻が「私の出番はなさそうだな」と密かに溜息をついた。

紗那は靄の動きをつかむと、それに合わせて体を左右に移動させてつとり早く仕留めたい所だが、相手は速さが並ではない。そのため攻撃は困難になる。

軽く舌打ちをすると、隣の政朝に目で合図を送る。彼はニッと笑い、紗那と苦戦している靄の塊に向かって刀を振り上げた。

それで、すべて終わると思った。だが、引き裂かれた靄は無数の糸のように細く分裂すると、なおも空中を浮遊し始める。

「な……っこいつら、増える訳え!？」

目を見開く紗那をあざ笑うかのように靄が一斉に襲いかかってくる。さすがの紗那でも防ぎきれない。反射的に刀を突きだした。

「!!」

光に照らされる刀に次々と密着する靄。紗那はその負担の重さに耐えきれず手を放す。

ひるんだその隙を狙い、靄が紗那に飛びかかる。政朝が駆け出そうとした時にはもう遅い。

「キャアアア!!」

だが、予想していたはずの痛みはいつまでたってもやって来なかった。恐る恐る瞼を開けると、そこには忠刻の顔がある。

「————!!」

抱きしめられていると分かるまで、さほどの時間はかからなかった。政朝より一步早く駆け出した忠刻と共にその場を離れなければ紗那はあの家臣と同じ状況に陥っていただろう。

「……怪我は、ないか」

紗那の目の前で口が開かれる。熱い吐息がかかり、紗那は耳まで赤く染まった。

「そそそそそれより忠刻様こそ…」

「怪我はないかと聞いている」

真剣な眼差しに見つめられ、紗那は目をそらさざるを得られなくなった。目を合わせたら最後、大気圏までぶっとぶハメとなるからだ。

「……………は…い」

聞こえるか聞こえないかぐらいの声でぼそりと呟いた。すると忠刻は安心した様子で紗那を解放する。

横目でその一部始終を見ていた政朝はおもしろくなさそうに口を開

いた。

「あと一秒早かったら僕が助けたんだけどなあ…惜しいな」

「何がだ？」

「あゝもういいや、兄上にそっち方面説明しても時間の無駄だから」
「うるさい。とにかく目の前の者を始末しろ」

忠刻のその声で我に返った。そうだ、まだ戦いは終わっていない。
顔を上げると、先ほどまで獰猛だった靄はこちらを襲おうともせず
自由気ままに空中を飛び回っている。

「…？何で急に大人しく…」

紗那のその質問に答えるように、突如辺りに声が響き渡った。最初
は風のような細い声だったが、徐々に音量が上がる。まるでラジカ
セなどの機械であやつっているかのような声だ。

「…これほどまでの実力とはな…あの靄の攻撃を避けたものは…
お前らが初めてだ…少しは認めてやる」

三人の顔が強張る。紗那は再度短刀を構え直すと声を張り上げた。

「あ…あなたは誰！？姿を見せないなんて、相当腕に自信でもない
の！？」

挑発してみたが、語尾が震えたので説得力はいまいちであろう。そ
の場に低い笑い声が響く。

「フン、姿を見せるだど？生意気な小娘が。良いだろう」

気配がしたのは、意外にも紗那の後ろだった。慌てて振り向くと、
五メートルぐらい離れた場所に人影がある。

身長は紗那よりやや高めだ。頭からつま先まで体を覆うヴェールの
ようなものがその人物の特徴をあいまいにさせる。唯一のぞく唇は、
冷たい薄紫色。

「我が名は^{かいらい}權禮…お前の先祖に値する」

ドクン、と心臓が音を立てた。自分に神力を与えたご先祖様。姫路
城内にある神社は、彼によって建築された。

「嘘を申すな、權禮様はとうの昔に亡くなっている!!」

忠刻の怒声にも、その者はまったくひるむ様子もなく答えた。

「ああ死んださ。だが、私はもう一度蘇った。千姫のおかげでね……」

突然忠刻の表情が変わった。見開かれた瞳は虚空を見つめ、荒い息を吐き出す。

「忠刻様……!?!」

彼に向かって伸びる細い腕は政朝によって捕まれる。政朝の体から放つすさまじい殺気に気づいた紗那は、驚いてその腕を振り払った。政朝は鋭い瞳でまっすぐにその者を見据えると、目にもとまらぬ速さで刀を投げる。鈍い音がして、その者のすぐ脇の壁に刀は突き刺さる。

「————二度と、權禮の名を語るな」

普段とは正反対のその気迫に紗那は悪寒が走った。その者はヒヤリとした微笑を浮かべると踵を返す。

「いずれまた訪れるであろう。その娘を、殺しに」

「まてっ!!」

しかし政朝が足を踏み出した時にはその者の姿はそこにはない。ざあ、と紅桜が舞う。

その秀麗な花びらは硬直する忠刻と紗那の間を通り過ぎ、儚く地面に落ちた。

紅桜と鮮血（後書き）

お久しぶりで御座います。浅葱です。いやゝ恐ろしいことに更新ペー
ースがすっかり落ちましたね！毎日暑くて夏バテですよゝ（笑）

忠刻 「何だ最後の『笑』マークは。笑ってことがすむと思ったら
大間違いだぞ阿呆め」

政朝 「世の中甘くないんだよ。たとえばテストとかね☆」

あゝもうゝその話題には触れるなどといったのにゝ期末テストが終わ
りました。

結果はゝまあ、ご想像の通りです。ハイ。

紗那 「情けないわねゝ見ててイライラしてくる！何でたかが校内
のテストで一位とれないわけ！？」

じ、じゃあ紗那、どうやったらそんなに頭良くなれたの！？教えな
さい！！

紗那 「まずは予習ね。あと復習も。そうすれば大体毎日六時間程
度勉強すれば一位ぐらい余裕よ」

……。はい、住む世界が違いますね。無視しましょう。さあ、こ
こからは明るい話題にしましょう。

ついに二十話いきました。なんか地味に嬉しいです。チマチマ更新
してやっところまで来れました。読者のみなさま、ありがとうございます
います。

では、今回は短めですがこれで。

炎と悪魔

どれくらい静寂が続いただろうか。強まる風に逆らうように一頭の馬が駆ける。

その馬を操っている忠刻はただ無表情で手綱を握りしめていた。

周りの空気は重々しく、一言言葉を発するのにも抵抗を感じるほどだ。

話せば殺す——そんな殺気が忠刻の全身から出ているようで紗那は先ほどがら頭一つ分身体を締め、流れゆく景色を暗い瞳で眺めていた。

そろそろこの気まずい空気にも慣れてきたころ、紗那は改めて脳裏に深く刻み込まれている記憶を辿る。

櫛禮を名乗る人物。

悲鳴。

紅色に染まる着物。
くれない

忠刻と政朝の困惑する横顔。

まだ思い出ただけで寒気が走る。あの地獄絵図とも呼べる惨劇で何故自分が正気でいられたのかも不思議だ。忠刻がここまで黙り込むのも無理はないだろう。

あの後、意識がかすむ自分を忠刻が気遣いすぐさま屋敷を後にした。その場は政朝に任せたので安心だとは思いますがまだ緊張の糸は張りつめたまま一向に緩まない。

ふと、そんな緊張感漂う中忠刻が口を開いた。呟くような小声だったが紗那の耳にはやたらと響く。

「あの權禮を名乗る者…確実に次の手を打ってくるはずだ。急ぎ帰らねば」

「……………ん」

何と返事を返したらよいのか分からずあいまいな言葉を口にする。そんな様子を見て彼は心配したのかぎこちない微笑を浮かべる。

「心配するな。城には私も、三木之助や、奈阿姫だっているであろう。何かあったら守ってやる」

トクン、と胸を打たれた。そんな言葉をかけられたのは初めてだ。

自分はずっといない存在なのかと思っていた。この世界で不要な者なのだと。

自分がいなければ忠刻や政朝に迷惑がかかることもなかったはずだ。そんな思いで頭の中がいっぱいになり、夜中布団で泣いたことも一度や二度ではない。

それなのに……

「忠刻様…」

「な、何だ、急に改まって」

「ありがとうございます」

紗那は目を細めて心からの笑顔を浮かべた。忠刻が恥ずかしそうに顔をそむける。

「い、いや、ほら、せっかくの權禮様の子孫が途絶えてしまうのは勿体ないであろう、そ、そういう意味でだなあ…別にそなたのことなど…」

不自然すぎるほど語尾を濁らせた忠刻に自然と声が漏れる。自白してどうするのだ。

「プッ」

「なななな何だ、私は何も口にしておらぬぞ!!」

「すみません、ただ、可愛くて…」

忠刻はさらに顔を紅潮させた。驚いたように目を見開き紗那を横目で見つめる。

「ふん、そなた、そういう趣味か…」

「ちがいますつつつつ!!」

今度は紗那が顔を真っ赤に染める番だった。グラグラと揺れ続ける馬の上で負けじと言い返す。

「忠刻様こそ、その、自分で言うなんて…」

この二人、周りが見ればさぞかしもどかしすぎて苛立ちを感じるであろう。だが、それに全く気付かない天然二人は言葉を失い、再び無言になる。

先ほどとはまた違った意味で気まづくなった。両者とも何を言っただけいいか分からず黙り込む。

その気まづい空気を救ったのは視界の端に映った城の門だった。到着だ。

「そっ…そろそろ着いたようね!」

「そっ…そうだな! さっそく馬を止めねば…」

忠刻がそう言い手綱を振り上げた時だった。前方から疾風のごとく三木之助が駆け抜けてきたのは。

「忠刻様——!!」

叫ぶ三木之助の顔面を見て二人は硬直した。彼は汗と鼻水と涙でグチャグチャだったからだ。

「一大事で御座います!」

お前の顔の方が一大事だよ、と両者は心の中で絶叫したがあえてスルーすることに決めた。

「というか、お前止まらなければ馬にひかれ…」

忠刻が忠告した時にはすでに遅く、『ぷちゅっ』という世にも悲しげな音とともに馬の下敷きとなる。

馬上の2人はどうして良いか分からず、とりあえず馬を止めることにした。

「……忠刻様、これ生きていますか…？」

「…分らん放置だ、放置」

チーン。三木之助、絶命。2人は静かに両手を合わせた。

「ふざけないでくださいっっっ!!」

「あ、起きたヨ…」

ものすごい勢いで忠刻につめよると大きく息を吸う。

「と・に・か・くっ!! あれを御覧くださいませ!!」

三木之助は大きく手を広げると真後ろを指差した。

だが、三木之助のがっしりとした腕が邪魔で肝心の物がよく見えない。紗那は身を横に反らして遠くを見つめる。

「!?!」

それは、すぐに目に入った。

城の敷地内にある森。その森の中心から天に向かって真っ直ぐに駆け上がる黒い煙。

「たしか、あそこは——」

さっきまで資料を探しに探索していた神社。重大な、神力に関する資料の宝庫。

——その神社がある場所の辺りで、黒い煙が上がっている。
時折混ざる駆けつけた人々の細い悲鳴。

「紗那、行くぞっ！」

突然腕を強い力で引っ張られる。気がついた時は馬上だ。忠刻も状況を察したのだろう、馬のまま城内へと突入する。

「た、忠刻様、馬をお下りになって…」

慌てて注意する三木之助の横を脇目もくれずに疾走する。紗那は振り落とされるのではないかと思い、忠刻の背中を掴む力を強めた。風が髪や頬を撫でてゆく。周りの景色など見る余裕もない。と、いうか速すぎて何も見えない。

あっという間に馬は赤い鳥居の前で停止する。忠刻がハアハアと息を切らせた。

全力疾走したからだと思ったが、違う。目の前の光景を目の当たりにしたからだ。

「何だ、コレは……」

忠刻の背中ごしにその光景を見た紗那も、思わず口元を覆った。

——その絶望と驚きで満ち溢れた赤い瞳に映るのは、炎を高々と上げて全焼している神社。火の海に囲まれている神社はもうその原型を留めていない。

炎の影響で紗那の頬や髪、全身が赤く染まる。時折混ざる「パチッ」という火と火がぶつかり合う音が聞こえるたびに炎は威力を増していった。

——もう、炎を消すことは不可能だ。

クツ、と唇を噛んだ。悔しい。何故、こんなことになってしまったのか。

これは自分のせいだ。

忠刻が付けてくれた優しい言葉さえも、今は自分を貶める卑劣な言葉にしか感じない。

自己嫌悪、という単語が脳をよぎった。まさに、今がそうだ。

隣の忠刻ががつくりと腰を下ろす。違う、腰がぬけたのだ。彼の拳が地面に直撃する。

「何…故…」

彼は、自分よりも数倍の悔しさを感じているはずだ。ギリ、と歯の鳴る音が響く。紗那はそれを見ないようにして顔を伏せた。

——彼の手の甲からは、拳を地面に激しく叩きつけたため血が滲み出ていたからだ。

「一体…奴は私からどれだけ大切なものを奪えば気がすむのだった…!!」

もう一度、地面を叩く。開いた傷口からはさらに真っ赤な血が広がっていた。

もう、やめて。

これは自分の責任だ。自分がやったことには、自分で立ち向かう。紗那の目には一つの迷いもない。キッと、伏せていた顔を上げると炎を見つめる。

そして、彼女はゆっくりと歩を進めた。忠刻が止めようと気づいた時にはもう炎の一手手前だ。間に合わない。

彼女は、炎の中へと消えた。激しさを増し、燃え盛る炎の中へ。

「紗那——っ!!」

忠刻は追いかけてしようとしたが三木之助に肩を掴まれる。ふりほどこうとするがさすが藩主の護衛役だけあって力は強い。無駄だ。

「なりませぬ! 忠刻様!」

「だが、紗那が…!」

「いけません!!」

ぐい、と三木之助は忠刻を引き寄せた。真っ直ぐに彼の瞳を見つめる。

「あなた様はこの姫路の藩主でございます。こんな所でみすみす命を亡くすことは私が許しません、それをお忘れなく」

「チッ…」

思わず似つかない舌打ちまでしてしまった。放せ。

私の手を、放せ。

藩主?それが何だ。一人の少女が炎へと飛び込んだのだ。助けなくてどうする。腰拔けが。

「……なせ」

「え?」

「私の手を放せと言っている!!」

瞬間、三木之助は主の全身から発するすさまじい殺気に思わず目を見開いた。普段の穏やかな気性からは想像できないほど目がつり上がっており、三木之助を捉えたまま目を逸らそうとしない。

一歩でも動けば殺す——そんな言葉がどこからか聞こえてくるようだった。冷たい冷酷な瞳。その整った顔からは何の感情も読み取れ

ない。

「あ…」

足が震えて三木之助は体制を崩す。――これは、誰だ!?

その隙を忠刻は身のがすはずもなく、手を振り払うと歩き出す。その姿はまるで炎を操るような悪魔そのもの。

三木之助は茫然と地べたに腰を下ろしたまま、炎の中へ消えていく忠刻の背中を見つめ続けた。

炎と悪魔（後書き）

本っ当にスミマセン！！更新すごく遅れました。

何気にユーザーページを開いた私は腰をぬかしました。

最終更新が一月以上も前：

こうして、やっとこさ危機感を感じた私は（遅い！）執筆に取り掛かったというわけです。

紗那 「まったく間抜けよね。どうせ『夏休みだから』とかいう理由で遊びまくってたんじゃないの？」

忠刻 「で、気が付いた時にはすでに遅く、この有様というわけか」

ハイ…それは本当にすみません…うん…

自分でも単純だということは理解しています。（汗）

政朝 「しかもさく執筆してる時に兄上の口調を間違えてて慌てて書き直してたよね」

忠刻 「…本当か？どこでどう間違えていた」

政朝 「兄上の一人称って『私』でしょ？でも、この間抜けな作者は『俺』って書いてた気がする」

言うな—————っ！！しょうがないでしょ！しばらく更新してなかったんだから忠刻様の口調なんて忘れて当然！！

フーッ…なんかこの感じ久々です。意外と長くなってしまったので、

このあたりで。

化け物と力

視界に入ったのは、白い蒼白な世界だった。

白。白。白。それ以外にも見当たらない妙な空間だ。そんな場所に自分は一人で立っている。

意識が朦朧とする。景色もぼやけてピントがあわないカメラのようだ。

でも、何故だか心地よい。

ここはどこなのだろう。何故、自分はこんな所にいるのだろう。

考えが働かない。何も考えられない。この世界に、いつそ飲み込まれてしまえば――…

だが、そんな紗那の脳裏を何かがかすめた。短い一つの単語。だが、紗那はそれですべてを思い出した。

『炎』

「あ…」

燃える神社。泣き叫ぶ侍女達。対応をせがまれる家臣。忠刻の涙。そして、私は――…

「…死んだの…?」

炎の中へと飛び込んで。真っ赤に染まる景色の中、意識が途切れて…

そうか、ここは死後の世界。自分はもう、あの世の人間。不思議と恐怖は感じなかった。霞む世界に、身をゆだねて。

終わらせよう。

すべて。

そうすれば楽になれる。

さあ、我を解放するがいい。

力を。

トキハナテ——：

「うっ：あああああっ！！！」

激しい眩暈に襲われ頭を掴む。これは、何だ？

何か抗えない力が自分の中で大きくなっていく。どんどん、どんどん：

——飲み込まれる。

「あああああああああああ！！！！！」

だが、何かが紗那の額に触れた。

『駄目』

凜とした、鈴のような声がその場に響く。紗那はその声にハッと我に返った。う

目を見開く紗那を『それは笑顔で見つめる。綺麗に切りそろえられた前髪。引き締まった紅い唇。優しい瞳。整った顔立ち。』

その天使のような美貌の持ち主は紗那だった。——いや、紗那に瓜二つだった。

——まさか、この人は。

「千…」

言い終わる前に、その人は紗那の額に軽く触れていた細く白い指を自分の紅い唇にあてる。

『私の名前は呼ばない約束よ。さあ、それよりもあなたにはするところがあるでしょう?』

「すること…」

『大切な人を助けなきゃ。その人は、きっとあなたを呼んでいる』

タイセツナヒト…

『行きなさい。その人を助けるには、自分の中にある神力を知る必要がある』

ふわ…と、優しい琥珀の光が体を包んだ。淡い光の中、紗那は自分の両手を見つめる。

「…行かなきゃ」

光が激しさを増す。前にいるはずのその人が見えない。ただ、まばゆい光の粒が不規則にその場を浮遊するだけで。ゆっくりと目を閉じる。頭から声が響いた。

『さようなら、紗那。また、どこかで会いましょう』

瞼の奥で、白い光が光った――

・・・☆・・・

「…ん？」

疑問形の語尾を発してしまった紗那はゆっくりと瞼を開く。
ぼやぼやとかすんでいた風景がやがてはつきりと見えてきた。

青い空。澄み渡るような鮮やかな青い空。わたがしのような入道雲
が浮かび、時折鳥が空をかすめる。

「えーっと…？」

朦朧とする意識の中、必死に記憶を辿る。だが、どうにも自分がな
ぜこのような状況にあるのかが理解できない。
自分は死んだのではなかったのか？

とりあえず分かることは、ここはどこかの森で自分はそこに大の字
になって寝っころがっている、ということだけだ。

「とりあえず起きなきゃね…」

少し貧血ぎみなのかふらつとしたが、立ち上がる。大きく背伸びを
してみた。これで少しは体が動かせるはずだ。

幸い外傷は見当たらない。炎に飛び込んだはずなのに何故だろう。

もややと脳内をいくつかの考えが浮かぶがすぐに消えていく。

「まあ、考えるのは後ね」

ここで紗那は立ち上がって初めて周りを見渡した。

崖の上の狭い道。ガードレールなどが立ってる訳もなく、端によつたら転落しそうだ。

道の両側には樹木が植わっており、鳥の気持ちいい囀りが聞こえてくる。下には川が流れている模様で、耳をすますと微かだが水の流れる爽やかな音が聞こえてきた。

この妙に落ち着く空間を紗那は知っていた。

姫路城から政朝の屋敷へ向かう途中の道だ。ここだけ異様に道幅が狭く、忠刻に「大事ないか」と声をかけられたので印象に残っている。

「じゃあ、ここは姫路城の付近ってこと…？」

わずかに胸に安心感が広がる。全く知らない場所に来るよりはまだましだ。

だが、その安心感は近づいてくる複数の足音によって断たれた。

足音の数からして敵は約五人程度。しかし、ガチャガチャと金属音がするということは武器を持っている。

太刀打ちできない数とはいえないが武器を所持しているとなると話は別だ。

とっさに自分の服装を見る。よれよれの蓬色の小袖に土で汚れた髪。確認できる所有武器は懷に忍ばせている、忠刻から渡された短刀のみだ。

圧倒的不利なこの状況。忠刻の正室だと主張してもこの貧相な身なりからして信じてくれる可能性は低い。

（どこかへ隠れようか…？）

だが、ここは崖の上の道だ。草むらはおろか、うっかり端によると足を踏み外してしまう。

こうして考えを張り巡らせている間にもどんどん足音は近づいてくる。紗那はキッと振り返った。

（一か八か…！！）

体制を低くして相手に突進する。耳元でヒュウと風を切る音が聞こえた。

「なっ…！？」

「曲者じゃあ…！」

その声を合図に全員が武器を構えた。だが、紗那はひるまない。

敵二人の右肩と左肩に重心をおき、大地を蹴る。そのまま一回転しようとしたところですかさず両足を二人の首元に叩きこんだ。

「ぐっ…」

「な…っ！？」

あまりに一瞬の出来事。しかし、無残にも地面に転がる仲間を見て、ようやく目の前の敵が只者じゃないことを悟ったらしい。

すぐさま槍を構えた一人が紗那に襲い掛かる。

だが紗那は得意の側転でその一撃をかわすと、着地ざまに相手のみ

ぞおちに拳を入れた。

「ぐお…っ…！」

これで三人目。残るは二人のみだ。

「あんた達、体操部の女王将を甘く見ると痛い目にあうわよ！」
ビシッと人差し指を突き出す。相手がウツと一歩退いた。

彼女の身体能力は普通ではない。毎日毎日、常人では考えられないほどのきついトレーニングをこなしてきた成果だ。
動きにも無駄がなく、なによりスタミナが半端ではない。たとえ槍を持っていようと彼女ならあっさりとその柔軟性と筋力で一撃してしまうだろう。

「さあ、来るがいいわ！」

しかし、相手は立派な武士だ。このような娘一人にやられたなどといえは一生の恥である。

「小娘ふぜいがあ！調子にのるでない！！」
すぐに手前の一人、遅れてもう一人が交互に槍をかまえて突き出してくる。

今までのようにやみくもに突進してくる相手ならよかったものの、今度は頭脳派のようだ。これは中々手ごわい。

素早さで誤魔化していたが、それが通用する相手ではないのだ。

「——っ！」

迫りくる刃先。それを何とか体をねじってよける。これはかなり危ない状況だ。

ザン、と何かが切れる音がした。痛みのする方へ視線を向けると、肩から腕にかけてザツクリと小袖が切れ、朱がにじみ出していた。徐々に激痛が全身に広がる。紗那はたまらず膝をついた。

「フン、もう終わりか。小娘」

「楽にしてやろう」

いやらしい笑みを浮かべて男が言う。紗那はただそれを睨みつけることしか出来なかった。

「ほお、そういう目をする中々の別品さんじゃねえか」

「実に殺すのが惜しいな」

男の刃が日の光を浴びてキラリと煌めく。紗那は思わず目をつぶった。

（殺される―――）

心臓がドクンと音を立てた。すると、その瞬間。

『貴様にはもう無理だ』

先ほど聞いた、低く、何の感情もない声が頭に響く。そして揺らぐ視界。

『さあ、我がすべてを終わらせよう』

カイホウスルガイイ―――：

「うっ」

頭を押さえる紗那。ぐらぐらと意識が揺らめく。また、この感じ――

『あああああああつ!!』

絶叫が響いた。男達は何事かとすんでの所で刃を止める。

『フン、我を殺すことが可能かと思っているのか、この下種共が』
「ひっ…」

声はたしかに紗那。だが、その傲慢な態度はあきらかに別人だ。再び立ち上がると、凍てつくような冷たい眼差しで男達を見据える。
『この娘はどうなってもよい。だが、我は神だ。神を殺すことは不可能』

一歩づつ男達に接近する。

『光栄に思うがいい。この神力の餌食となれることをな』

「ヒイイツ!ば…化け物おっ!!」

男は槍を投げた。が、紗那――いや、その者はそれを素手で受け止めると爛々とその目を輝かせる。

まるで、小さい子供がおもちゃを手にした時のように…

『死ね』

「ぎゃあああああああ!」

刹那、光の鎌が空気を切り裂いたかと思うと、目の前には全身を切

り刻まれた男達の死体があった。

じわじわと朱がにじみ始め、地面を真っ赤に染める。

『く…っ、久しぶりに力を使ったせい…か…』

その者は、腰を折るとその場に崩れ落ちた。

それはもはや紗那だが、紗那ではない。

――化け物。

そんな気絶した紗那の目の前に、一人の老人が立つ。
厳ついが、どこか優しい風貌。

「面白い物を見てしまったようじゃない…」

化け物と力（後書き）

：はい。皆様様、お久しぶりで御座います。浅葱です。久しぶりすぎて名前を忘れてしまった方も多いと思われます。フルネームは浅葱恵莉です。

約一か月ぶりですね。皆様元気ですか？私は^{わたくし}元気です。
：というアホな前置きは置いておいて。

ごめんなさい！更新すごく遅れました！！
ああ、そのあなた、「もう浅葱なんて知くらない」とか言わないで！

そのあなたもお気に入りからはずさない！

ふー…と、一人で言っているだけでも悲しいだけなので。

お気に入りが増えていました。新に登録してくださった方、登録している方、ありがとうございます。

しばらくこの『変態ファンタジーラブコメディ』↑(?)にお付き合ってくださいませ。

なんだか初めてまともな後書きを書いた気がします。
それでは、このへんで。

時空移動と姫路城

「ん…っ…」

床から伝わる冷たさに紗那は目を覚ました。霞んでいた視界が徐々にはっきりと形を成す。

「え…っ…ここは…何処!？」

目の前の光景を見て一発で目が覚めた。

そこは、どこかの倉庫の中のようなだった。

土でできた崩れかけの壁に、木の枠が外れた窓。そして床はなく土が直にひかれており、部屋の隅には藁が無造作に積んであった。どうりで寒いはずだ。冷え切った地べたに寝ていたのだから。

「な、なんでこんな所に…」

と、その時タイミング良く一人の男が姿を現す。男といっても老人だ。

頭は丸坊主で、地味な藍色一色の着物を身に着けていた。強面だが、雰囲気はこの上なく和やかだった。

その老人を見て、紗那は一瞬ひるむ。

（ま、まさかこの人、ヤ●ザの親玉とかじゃないでしょうね…!! スキンヘッドだし!! 厳ついし!! 私を監禁して売り飛ばす気!? それともまさか、エンコーとか!? どっちにしろいやああ…!!）

と、十五歳にしてはマセた想像を張り巡らせている紗那に、その老人は笑みを浮かべた。厳つい表情が一瞬にして消える。

「そんなに怯えなくてもいいんじゃないよ。すまないな、このような場所に押し込めて…」

「い、いえ、とんでもない！！私はエンコーがしたくはありませんので親分！！」

慌てて意味不明の宇宙語をしゃべってしまったが、この老人は悪い奴ではなさそうである。

一安心した紗那に、老人は懷から湯気の上がる茶と和菓子を出して目の前に置く。

どうやって懷に入れていたんだとツツコミたくなったが、とりあえず茶を一口いただいた。

冷たくなっていた心がしだいにポカポカと温まっていく。思わず全部飲み干してしまった。

「…おいしい」

声が漏れた。その様子に老人も安心したのか、その場の緊張感が緩む。

「そうか、それはなによりだ。すまないのお、これぐらいしかお出しできないものでな…」

「いつ、いえ、そんな、お構いなく！」

どうしても、この老人には礼儀正しくしないとイケない気がして小さい態度をとってしまう。

一体この人は何者なのだろう？

茶菓子まで丁寧にならげた紗那はその場に正しく正座し直した。

「あの…」

「ん？」

優しい顔で老人が振り返る。紗那は一つ咳払いをした。

「ここは…何処なんですか？」

ありふれた質問に老人は躊躇うことなく答える。

「姫路城…かな？」

「かなって何ですか！かなって！！」

嘘だ。ここは姫路城ではない。以前、場内を散策したがこんな崩れかけの小屋は見当たらなかった。

「…正確にはこれから姫路城になるといったほうがいいみたいじゃない」

「これから姫路城になる？はあ！？」

頭の中が混乱してきた。姫路城は姫路城だ。考えられることは一つ。この老人はボケているのだ。

「な〜んだあ〜そういうことかあ〜空は青いなあ〜☆」

ボケてるのはどう考えても紗那である。老人は精神病棟にいる患者を心配して覗き込むような顔で言葉をはさんだ。

「…いきなり信じろろいっても無理があるようじゃ、とりあえずあれを見るが良い」

すると、老人は紗那の背中をぐいぐい押すと、小屋の外へと引きずり出した。

「……………え？」

そこにある光景が信じられなかった。いや、こんなことがある訳がない。でも、実際に目の前に…

「なに…コレ……」

そこに、姫路城はなかった。いや、骨組みだけなので完全には言い切れないが。

何本もの太い材木が姫路城の骨組みを作り上げている。よくよく見ると上半身裸の男達が懸命にその材木を運んでいた。

足が震える。自分が何故立っているのか不思議だ。どういふことなのか？まさか、あの炎が城にも燃え移ったのか！？

しかし、紗那の考えはどれも違った。老人が遠い目で姫路城の骨組みを見上げる。

「…姫路城は今、建設中じゃ。予定では、今年中に完成する」

ドクン、と心臓が音を立てた。この老人は、何を言っているの…？今までの記憶が走馬灯のように脳内を駆け巡る。ようやく状況が分かってきた。まさか、また私は…

「タイムスリップ…？」

聞き取れないくらいの小声でそう呟いた。声が震える。

けど、そう考えれば全てつじつまが合う。いや、それしかこの状況を説明する方法がないのだ。

『炎に飛び込んで、なんらかのきっかけで時空を超えた』ありえない話だ。

そう考えると、姫路城が建設されたのは1346年。忠刻たちがいた時代が1620年だったから…

約、260年ほど前にタイムスリップしたようだ。

「…と、なると今は南北朝時代ってことね」

「ん？」

「い、いえ何でもありません！」

ようやく落ち着いた紗那に老人は安堵したのか踵を返した。

「…さて。そろそろ説明しようとするかの。この世界のことを…」

再び小屋に戻るようにと視線で促されたので紗那は小走りに急ぐ。
老人は丁寧にも小屋の扉を閉めると紗那の向かいに正座した。

「単刀直入にどうかの…紅梅紗那君、君は『力』の持ち主だね」
「な…っ」

直入すぎる。驚いて目を見開く紗那に老人は容赦なく続けた。

「君は今、大変危険な状態じゃ。このままいくと、『力』に身体を
制御されてしまう」

「ち…ちよつと…そんなたて続きに言わないでくださいっ！」

予想外に大きな声が出てしまい、内心自分でも少しびっくりしている。
だが、今の状況が理解できていない紗那にとっては無理もない。
だが、老人はそんな様子に驚くことなく、黙って紗那を見据えている。

「すみません…でも、あなたはなんで私の名前も…『力』のことも
知っているんですか!？」

初夏の訪れを告げる柔らかな風が崩れかけの窓から吹き込んできた。
それに合わせるように老人は言葉を紡ぐ。

「…私は、『力』の映像を見ることが出来る。『力』を見れば、そ
の人の過去や歩んできた道のり、さらには情報まで読み取れるのだ
よ」

「…!!」

「気絶した君を見た時、私はすぐに『力』の持ち主だということを
悟った。そして情報を解析した所、君が『紅梅紗那』という名前だ
ということや、この時代に飛ばされたということも知った」

驚きのあまり言葉を発せないという紗那に老人は申し訳なさそうな表情をして顔を伏せる。

「すまないな、君の了承も得ずに勝手に心の中をのぞいてしまつて……」

その言葉に紗那はついに力が抜けた。傾ぐ身体をとっさに両手で床をついて支えると、老人に向き直る。

「あ……あなたは一体何者なんですか……!?!」

ざあ、と小屋の外に生える大木が風によって揺れた。窓の隙間から、青々とした葉が一枚入り込み、老人の顔を一瞬隠す。

「……挨拶が遅れて失礼、私はこの地に代々住む僧侶の末裔。名を、權禮と申す」

時空移動と姫路城（後書き）

はい。こんにちは、浅葱です。更新ペースが一か月に一度というのが当たり前になってしまった自分が怖い今日この頃。…情けないなあ、ほんと…

さてさて、今回の23話で物語はついに最終章へ向けて動き出します。タイムスリップによって先祖、權禮と出会った紗那。これは何を意味するのか！？…と、こんな感じでいいんでしょうかね。

紗那 「ずいぶん態度がでかいけど、さてはもう話を稼ぐネタがなくなっただけだね？だから最後の切り札、最終章にはいっ…」

はい、何にも見えません、聞こえませんか！！空耳ですかね、今のは…と、まあ何にしてもグタグタですが、次回へ続きます！（とうとう期待？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6918k/>

白鷺の砦

2011年1月23日21時42分発行